
転生した異世界で金を荒稼ぎ

ビフィズス菌

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

転生した異世界で金を荒稼ぎ

【Zコード】

Z5527Z

【作者名】

ビフィズス菌

【あらすじ】

高校生のお小遣いよりも月収が安く、
その上毎日16時間労働という過酷な人生を歩む俺は
ハードブラック会社に遅刻しそうになり、
車にはねられて死んでしまった。

しかし、死んだ俺を待っていたのは天国でもなく、地獄でもなく、
魔物がうようよいる異世界であった。

異世界で金を稼ぐのが目的のダメ人間な俺は
怪しげな魔術師に魔法を強制的に教えられ、

そのまま異世界で生活する」となる。
果たして異世界生活を満喫する「とまどり」ができるのだろうか? . . .

第1話 「俺、異世界に転生する」（前書き）

唐突に思いついたものを書いてみました。

更新頻度はあまり多くないと想いますが

ぼちぼちUPしていくので宜しくお願ひします！

タイトル横の残金表示は邪魔なので消しましたw

第1話 「俺、異世界に転生する」

俺は斎藤広幸。会社員だ。

俺の勤めている会社は給料が極端に安い。

ハンパじやない。月収が高校生のおこづかいよりも少ない。その上、上司はがみがみうるさくてストレスが溜まる。

まあここは1億歩譲つて我慢してあげよう。

しかし、俺の一番気に入らない点がある。それが・・・

重労働だ。俺の会社は一日16時間もの労働をする。

なのにこの安い給料なんだ。給料を60倍くらいにしてもらいたい

ものだよ。

そして俺も俺だ。顔は中の下、運動神経0。通知表も今までずっとALL1だった。

恋愛経験ももちろん0なわけで、俺はダメ人間の代表と言つても過言ではなかつた。

そんなある日、俺はハードブラックな会社に遅刻しかけた。

俺は非常に焦つている。それもそのはずだ。

ハードブラック会社は1秒でも遅刻した瞬間に、その月の給料が0になる。

いくり少ないとはい、ただ働きだけは「めん」だ。

俺は朝食を食わずに家を飛び出した。

といつよりは食べたかったが冷蔵庫にはなにもはいっていなかつた。

「あと3分!」俺は更に走るスピードを上げた。

しかし、俺は運動音痴だ。足の速さも小6と変わらないくらいの遅さだ。

俺は自分の足の遅さに嘆きながらも走り続けた。

「あと一分ーー！」やつと会社が見えてきた。

しかし会社にたどり着くまでには大きな壁がある。横断歩道だ。ここでの信号は一度タイミングを逃すと、一分くらいは青に変わらない。

俺がたどり着いた頃には既に赤に変わっていた。

「ちくしょおおおおーー！」俺は何も考えずに信号無視をした。

「ぎゃあああーー！」俺は案の定車にはねられた。いや、俺は車にはねられることを願っていたのかもしれない。だんだんと意識が薄れていく。俺は目をつぶった。

8月21日。斎藤広幸、死亡

「・・・本当にこんな人生の終わり方でいいのですか？」どこからか声が聞こえる。

俺は目を開くとあたりは真っ暗であった。

すると、闇の中から青いマントを着て杖を手にしている一人の男が現れた。

「あなたは・・・？」

「私は魔術師、簡単に言つたら魔法使いと言つたところでしょうか？」男は言つ。

「は、はい？」俺は聞き返した。

それもそのはずだ。魔術師？魔法使い？そんなものが世界のどこにいるというんだ。

いるわけない。あれは物語上の話であつて実在するはずなんてないのだ。

「おや、信じられないという顔をしていますね。」魔法使いは笑いながら言った。

「おいおい、そんな奴いるはずないんだよ。大人をからかうのもいい加減にしろ」

「それがいるんですよ。少なくともこの世界にはね」

「一体どうこいつですか？」俺の頭の中で、マークが渦巻く。

「簡単に話を説明しますね。まずアナタはこの前車にはねられて死にました。

そして、本来ならそこで物語終了だといつところですが、作者はそこまで甘くないのです。

あなたはもともとの世界ではクズ人間、ゴミ人間、生きる価値のない人間・・・

我々はそのような生きる価値の無いクズ人間にチャンスを与えるのです。

もしアナタがもう一度人生をやり直したい、と願うのであればそれを叶えてあげます。

そう、我々の住む世界、異世界で！」

「・・・・。」俺は全く理解できなかつた。

「おやおや、異世界が何かわからないようですね。

異世界とはアナタが前まで住んでいた世界とはかけはなれたものです。

スライムやドラゴンなどの『魔物』が世界にうようよいたり、魔術師、剣士、盗賊などなど色々な職業をやつている人たちが魔物を討伐したり、アイテムを採取したりと『クエスト』をこなして、その報酬金で生活しているのです。どうですか？あなたの勤めていたブラック会社より簡単で大量に金稼ぎができますよ』魔術師は言う。

「なるほど・・・しかし俺が異世界にいきたくないと言つたうじうなるんだ？」

「それもアナタの判断です。まあその時はアナタをそのまま死後の世界へと送りますがね」

俺は考え込んだ。今まで生きていてるくなことはあつたうじうかもしこのまま異世界に行つたとしても楽しく生活していくのだろうか？

俺は考え込んだ。・・・そして結論をだした。

「俺は異世界で金を荒稼ぎしたいんだ。だから異世界に行く」と「する。」俺は言った。

実際、俺はこの世界を通して自分を変えようと思つたのだ。

「わかりました。それでは田をつぶしてください。」
そして田を開けたときには広い草原がある場所にあなたはいるでしょう。

そこでアナタは私を見つけて話しかけてください。」そう言つて残し魔術師は消えていった。

「これから俺の第一の人生が始まる・・・」俺はそのまま田をつぶつた。

今から俺の異世界での人生が始まるのだ。

目を開けると俺は魔術師の言つたとおり、草原にいた。

「ヨリはビーダだ？」俺は魔術師を探し始めた。

俺がしばらく草原の周りを搜索していると小屋のよつたな場所を見つけた。

「お待ちしていましたよ」魔術師はその小屋からでてきた。

「では早速異世界について詳しく説明しますね。

この異世界で生活をしていくに働くがなくていけません。
しかし働くといってもそんな簡単にはいきません。

ギルドに登録し、そのギルドでクエスト受けて、魔物を倒さなくてはいけません。

そこでアナタにはこれから私と修行してもらいます。

あなたが異世界で生活できるようになつたら私がいいギルドを紹介します。

そこでアナタは生活をしてもらいます。まあ私の修行を乗り越えられたらですけど

「おいおい、そんな面倒なことするんですか」俺は呆れた口調で言つた。

「じゃあ早速炎の魔術を習得する修行を始めましょつか」魔術師は俺を完璧スル。

そして魔術師は俺の腕を掴んだ後、なにかの呪文を唱え始めた。

次の瞬間、俺は先程までいた草原とは全く違う場所にいた。そこは、周りを崖に囲まれており、ごつい岩が転がっている場所だった。

「では、早速修行を始めます」魔術師は右手をだした。

「炎の精霊よ、我的体に力を示せ！ファイアボール！」魔術師の右腕から炎がでてきて、球体を作り出す。

その炎の球体を魔術師は崖の方に投げた。すると、崖の上にあつた大木に直撃し、大木が折れて炎が木に移つた。

あつという間に勇ましかつた大木はただの切り株と炭になつてしまつた。

「どうですか？簡単でしょ？」

第1話 「俺、異世界に転生する」（後書き）

感想・評価などお待ちしています！

第2話 「俺、初勝利する」（前書き）

今回は、色々な技を覚えた広幸が
初めて魔物と戦う話です。
ちょっとギヤグも入れてみました！

第2話 「俺、初勝利する」

「どうです？簡単でしょ？」魔術師はニヤリと笑い言った。

「簡単じゃねーよ！」俺はツッコミを入れた。

「まあまあそんな焦んなくても一から教えますから」魔術師は俺の怒りを抑えるように言った。

「こうして俺と魔術師の修行は始まつたのだ…

「ハア・・・・ハア・・・・」

「凄い集中力と頭の回転力・・・アナタは本当にダメでクズな生きる価値のない人間だつたのですか？」魔術師は言う。

「まあ集中力の持続はハードブラック会社で鍛えられましたから。それと俺のことをダメでクズな生きる価値のない人間つて言うのやめてくれます？」

「冗談ですよ、冗談。でもここまで習得が早いのは予想外でした。」

「そう、俺は魔術師のスバルタな指導の元、いくつかの魔術を習得したのだ。」

・ファイアボール

手のひらに炎の球体を作り出し、相手に投げつける攻撃魔法。
俺の場合、チャーハンがぎりぎり炊けないほどの火力。当然敵は焼き殺せない。

・アイススピア

手のひらに鋭利な氷を作り出し、相手に投げつける攻撃魔法。
俺の場合、つらつらとほぼ変わらない。

・イナズマアロー

雷の矢を形成し、相手に飛ばすことで雷撃を与える攻撃魔法。
俺の場合、乾電池一本分と同じくらいの電流・電圧。

・ウォータードリル

水を激しく回転させ、相手の体を削る攻撃魔法。
俺の場合、水洗トイレと変わらない回転力。

「・・・なんか俺の技全部力スくないですか?」俺は魔術師に聞く。

「そりやそうですよ。あなたはまだ異世界に入つて3日間しか経つてないじゃないですか。

魔力も戦闘を何度もしないと上がりにくいですし、それにあなたはダメ人間ですよ?

そんなダメ人間が異世界に来てチートキャラになるなんて作者が許してくれると思います?」

魔術師は冷静に言った。その口調のせいで、俺のガラスのハートが粉々に割れた。

それからも、俺の魔術師の修行は1週間程続いた。

「ハア・・・・・ハア・・・・」

「もうだいぶ安定して魔術を使えるようになりましたね。
じゃあそろそろ実戦と行きましょうか。」魔術師はそう言い、俺の

腕を掴んだ。

そして、俺と魔術師は前にいた草原へと移動した。

「じゃあ早速戦闘を始めましょ。ルールは簡単。この草原に『ブルースライム』という、体が青い色の典型的なスライムが生息しています。

そのスライムを倒してください。

そうすればあなたを一人前の魔術師と認定して異世界の本当の舞台へと連れて行くことを約束します。」

「ちょっと待ってください！俺まだそこまでの魔術は使えないですし……

魔術だって、日常生活を支える程度の貧弱なのしか使えないでもん

「まあ頑張ってください」魔術師は人事のようになに俺の本音をスルーしやがった。

「まあやるしかないよな」俺はしうがなく魔術師の言う通りにブルースライムを討伐しにでた。

「どこにいるんだろうか？」俺は草原をくまなく搜索する。ちなみに視力は両目ともにA(2・0)だ。ダメ人間な俺の唯一の自慢できるところだ。

そうこうしているうちに俺はお手当でのブルースライムを見つけた。「不意打ちなら勝てるかもしれない！」俺は卑怯な手を使う。なぜなら自分が勝つためなら手段を選ばないクズ人間だからだ。

「氷の精霊よ、我の体にその力を示せ！アイスピア！」

俺の手のひらに何本かのつららのようなものが出来上がる。
俺はそのつららのよなものをブルースライムめがけて投げつけた。

つららは奴の体に突き刺さる。

もちろん全くといつていいほどダメージをえられなかつた。
というより、俺のつららの完敗だ。あたつた瞬間に、さきつちよが折れてしまつた。

「グギギガ！」スライムは俺の存在に気付き、勢いよく突進してきた。

スライムの発した鳴き声はあまりにも気持ち悪く、
俺の中の貧弱でかわいらしいはずのスライムのイメージがぶち壊された。

「痛つ！」スライムの突進がモロに俺にヒートした。

だけども所詮はスライム俺と同じく雑魚キャラだ。俺は少しよろけただけだつた。

「やつぱり、貧弱魔法じゃ倒すことは不可能か・・・」

俺は考え込んだ。自分の貧弱魔法でもあいつを倒せないかと。
そして俺はある方法を考え出した。早速準備にとりかかる。

「いっちまで来い！」俺はスライムから全速力で逃走した。
さすがにスライムは鈍足だつた。小6並の俺の速さにも追いつけていない。

そして、俺はスライムとの距離をとつた後、地面に向かって魔法を使つた。

「水の精靈よ、我の体にその力を示せ！ウォータードリル！」

俺の手に空氣中の水蒸氣が集まり始め、できた水が手の周りを回転し始める。

そして地面に手を押し付けると、地面がだんだん削れはじめた。

そして、ある程度の大きさの穴を作り上げた。

スライムはだんだんと迫つてくる。

「もう時間がないな・・・」俺は手にまとわりついている水を穴へと移した。

穴が水で満杯になる。そして、そこにスライムが飛び込んできた。

「グガガガ？」スライムは水たまりの中に入った。

「今だ！雷の精靈よ、我の体にその力を示せ！イナズマアロー！」俺の手のひらに雷の矢が形成された。その矢を俺は、水たまりへと投げ込んだ。

「グガガギガギ！」スライムは感電した。

いくら乾電池並みの電流だったとはいえ、水は電気抵抗が少なく、スライムに電流がよく通る。

一瞬でスライムがクラゲのように水面に浮かび上がった。

「やつたあーーー！俺の初勝利だあー！」俺は嬉しさのあまり歓喜した。

そして俺はクラゲ化したスライムを掴んだ。

「うわあー・・・なんかぬめぬめしてて気持ち悪い・・・」

俺は初めて触るスライムの感触に嫌悪感を覚えた。

しかし、我慢して持ちながら魔術師の方へと向かっていった。

「持ち帰りましたよ、はい。」俺は魔術師にスライムを見せた。

「おお、おぬでじりげれこめあ。やせつあなたなりやれぬじゆつて
ましたよ。

・・・・・「」「れはー?」魔術師はスライムを見て驚いた。

「じりしたんですか?」

「」のスライムは、じりせり青魔石を持つてこむよりですね。
ほり、これを見てください。」魔術師はスライムをハツ裂きにして
中の臓器をとりだした。

「何してるんですか!? 気持ち悪いにも程がある!」俺は絶叫した。

「まあまあ、ほり、心臓の中に青い石のようなものがありますよね?
これが青魔石といづブルースライム特有の産物です。
この青魔石は売るとき、お小遣い程度は稼げますよ。今回は私が買
取りましょ!」

魔術師はそう言つて俺に30000メイルを差し出した。
メイルといづのはこの異世界共通のお金だそうです。
1メイル=約1円と考えてください。

「」これは!?俺の円収より高い!・・・

「どんだけあんたの会社の給料低かつたんですか!」魔術師もひす
がに驚いたらしく。

「そんなことはさておいて、これよりあなたを異世界の本当の舞台
へと送りたいと思います。

あ、卒業祝いに色々とプレゼントを用意しましたよ。」魔術師はそ
う言つて袋を差し出した。

そして俺は腕をつかまれ、またもや転送された。

俺が目を開けると、そこにはたくさんの人がいて、賑わっている街であった。

中には色々と入っていた。それぞれの物品に説明書のようなものがついている。

- ・3万メイル

このお金で宿屋に泊まつてください。

- ・ヒュペノイドコールス

あなたの住んでた世界でいう、携帯電話と同じようなものです。なにか質問等ありましたら、電話してください。

- ・女性用下着

あなたの住んでた世界でいう、パンティと同じようなものです。きっとこの先あなたを助けてくれると思います。

「いらっしゃい！なんの役に立つんだよー」俺はシッコリを入れた。

- ・森羅万象携帯用図鑑

あなたの住んでた世界でいう、ポケモン図鑑と同じです。戦った相手の情報、産物や、アイテム、地図、などなど多彩な機能を持ち合わせた高性能なアイテムです。こいつでポケモンゲットだぜ！

「なんか小説の趣向変わっちゃつてるよー」俺はまたもやシッコリを入れた。

そうして中身の物品を全部確認し終えた。
あと、もう一つ中に手紙が入っていた。

「広幸君へ、今君がこの手紙を読んでいたとしたら君は賑わつて
る街にいつたところでしょう。

今あなたがいるところはブロンダ街です。

そこにかつて私の相棒であった男の勤めているギルドがあります。
彼には君の事を説明しているので、ギルドに登録させてもらえると
思います。

そこで、ギルドに向かってください。そして、登録をしてください。
場所はポーモン図鑑・・・じゃなくて、森羅万象携帯用図鑑に掲載
されています。

では、よい異世界生活を

「なるほどな・・・これが」俺は図鑑を取り出した。
そしてギルドの方へと走り出していく。

田線：魔術師

あれほどまであの男ができる奴だとは思つていませんでしたね。
やはり私の見込んだだけの奴ではありました。

この先、あのギルドの奴らと仲良くできるといいんですが・・・
まあ私はアナタの生活を楽しませていただきますよ・・・広幸君

残高：0メイル
収入：33000メイル
支出：0メイル

合計：33000マイル

第2話 「俺、初勝利する」（後書き）

感想・評価などなどお待ちしています！

第3話 「俺、ギルドに登録する」（前書き）

今回は広幸がギルドに登録するお話を。
早くも美少女キャラが登場しました。
恋の展開も考えていかねば・・・

第3話 「俺、ギルドに登録する」

「……が魔術師の言つてたギルドか」俺はギルドにたどり着いた。ギルドは3階建てぐらいになつており、大きく「PUNISHMENT」と書かれている。

ちなみにPUNISHMENTと言うのは、『罰』という意味だ。なんとも氣味の悪い名前だな。

とりあえず俺はギルドの中に入つていった。

中は酒場のようになつており、壁のボードにまびっしりとクエストが貼られていた。

俺は周りの奴らに奇妙な目で見られる。ビツやアアまり歓迎されでないらしい。

俺は周りの目を気にせず、バーカウンターの方へと歩いていった。

「何を飲みますか?」バーテンダーは聞いてくる。

「いや、ちょっとギルドに登録したいんだが……」俺はそう言つた。

すると、周りの奴らの目の色が豹変し、みんな寄ってきた。ちょっと氣味が悪いと思いつつも、俺はその場に立ち止まっているとその中から一人が話しかけてきた。

「おい、お前にこをどこだと思つてているんだ?」そいつは言つた。

「いや、普通にただのギルドだと思つてているけど……」俺は普通

に返答した。

「ふざけてんじゃねえ！！クソガキが！」俺はそいつに殴られた。周りの奴らが止めにかかる。俺はフランクながらも、バー・テンドーに聞いた。

「なんであいつ怒っているんですか？」バー・テンドーは答える。

「しょうがないですよ。このギルドの奴らは気性が荒くてね。特に今のやつ、ペスカは誰よりも新人が嫌いなんですよ。それより、本当にこのギルドに登録していいんですか？まあいいと言うのならオーナーの所で手続きしてください。オーナーは3階にいます。」

「まあ、」一寧にありがとうござります」俺はオーナーのいる3階へと向かっていった。

目線：ペスカ

なんか変な新人がのこと入ってきやがった。

そいつはなんだかわかんないけど一番腹がたつ奴だった。

俺はそいつに聞いてみたんだ。

「おい、お前ここをどこだと思っているんだ？」と。すると奴は、「いや、普通にただのギルドだと思っているけど……」って答えた。

なめてやがると俺は思つたんだ。そして気付いたらそいつを殴つていた。

全く、気に食わないがギルドに入るならしきがない。でもできるだけかわらないうにしておこう。

田線：広幸

「「」」がオーナーのいる部屋か」俺はドアを開けようとした。ドアの取つ手を掴んだ瞬間、俺は思わず身震いをした。

中にものすごい奴がいる、それを肌で感じたんだ。

しかしあつ後戻りはできない。俺はあいつに殴られてから思つたんだ。

「絶対にこのギルドに入つて、あいつを超えてやる」と。

俺は勢いよくドアを開いた。

「すいませんー。このギルドに登録したいんですけど」

椅子に座つていた男は立ち上がつた。男はとても巨大な体で、もの凄い筋肉であつた。

「なんだ？お前が魔術師ロウの言つてた男か？」巨大な男は言ひつ。

「はい。私はロウ師匠に魔術を教えていただき、このギルドに入りたいと志願しました。」

こうこう時はあんな野郎にでも敬意を表さなくては。

「よかわい。あいつの頼み」とだ。・・・それに何よりお前は面白そつな感じがする。」

「はい？」・・・「」の男、全く意味がわからん。

「お前、元からこの異世界にいたわけでは無いな」男は言った。この男、どうやらただものでは無いらしい、と俺は感じた。

そして俺は正直に全てのことを話すこととした。

「なるほどな・・・お前は一度死んでおり、口うりよりって異世界に転生されたわけだな。

そのような奴は他にも何人も見てきたぞ。まあどこいつも死んでしまつたがな」

「そんな恐ろしいこといわないでくださいよー」俺は身を震わせ言った。

どうやら転生してきた奴らは俺以外にもたくさんいるらしい。しかし、異世界は前の世界にあつたゲームのようには進まず、だいたいの奴は魔物に殺されてしまつそうだ。

「ははは、まあお前にはなにか特別なものを感じじる・・・よしー、ギルド登録の許可をしよう!

これからお前はこのギルドの一員だー」この世の中の平和のためにクエストをこなしてくれ!」

「わかりました。でもこれだけは言わせてください。
俺は平和なんかのためにクエストはやりません。全ては金を稼ぐためだけです」俺は言う。

カツコよく言つてみたが、内容は金目当てのただのクズ人間だ。
「ハハハハハー!!」いつは面白い野郎だ!
あ、自己紹介がまだだつたな。俺はギルド『PUNISHMENT』のオーナー、カーキ・フレアだ!
これからよろしく頼むぜ。早速だが、お前はこの街をあまり知らないようだ。

ちょっとギルドの一員に案内してもいいよつよつ頼んどくよ」とフレアは言った。

「わかりました。これからよろしくお願ひします!」俺は頭を下げて言った。

これから俺の金稼ぎが始まるのだ、と思ひと喜びを抑え切れなかつた。

しかし、異世界生活はそんな簡単にいくものでもなかつた。

田線：魔術師ロウ

「ジリヤリ無事にギルドに登録できたようですね」私は広幸と電話していた。

「はい、ちよつと氣に食わない奴がいましたけど・・・」彼は言つ。

「やはりそうでしたか・・・まあこれから彼らと打ち解けていくてくださいね。

あ、あとギルドでは単体行動もいいですが、パーティーを組んでおいた方がいいですよ

「なるほど・・・まあ誰か気の合ひそうな奴がいたら組みますよ。それじゃあ」彼は電話をきつた。

やはり、彼は面白い。面白いですよ。

じつそりフレアとの会話を聞いていましたが、

金田荘でクエストをやる、とオーナーに堂々と言ふ人がいるでしょうか?

彼にはどくとくの魅力がありますね、それが裏田にでないといいのですが・・・

「まあもう少し楽しめさせてもらいましょうか、広幸君」

目線：広幸

俺はちゃんとギルドに入会することができた。

そして俺は今、人生最大のチャンスを迎えている。

徳は僕士をせし。でいふらしの女の人はこの街を案内しておら。おが

た

その女の子は青色の瞳をしていて、まさに異世界で感じた。

モレ、頬は整つてあつ、女優特有の二ナリの

た。

な胸で、モデル体型であつた。

これは尋常じやない。写真を撮つて見せてあげたいくらいだ。

まあこの世界はアシタカがメテなどとしない機械に無いのだニニが

「あ、あの、そ、その、こ、今回は宜しくお願ひしますうううう！」ダメだ。ありえないほど緊張する。先程から手汗が半端じゃない。

「そんな緊張しなくてもいいんだよー」からかうを宣しくね!」女の子は普通に話しかけてきた。

声もかわいい。もう全てがかわいい。

でも俺みたいなダメ人間が手をだしてはいけない存在なんだ、と俺は痛感した。

「よ、みうじく。俺の名前はヒロユキ。君の名前は？」俺は震えを

「いや、なんとか話した。

「私の名前は、ハーブ！剣士をやつているの。でも私も3日前にギルドに入つたばかりで・・・あ、でもヒロコキよりは先輩だねつ」ハーブは今以上に近くに寄りそつてきた。

もうダメだ！！俺の心臓が張り裂けそうううううー！俺は初めて恋というものを知った。

「じゃあれつくり街案内するよー」やつ言いながらハーブは俺の手を握ってきた。

「うふ、うふ、うふおーーー！」俺は顔を真つ赤に染めた。

「いやしてると、恋人同士みたいでしょ？・・・ダメ・・・かな？」ハーブは俺に上目遣いを使つてきた。これがもうたまらませえええん！！

「は、はやく、あ、案内、し、してくれよ」もうカタコトで何を言つてゐるかわからなー。

「はーはー、はじめにこーが武器屋だよーー！」おおかたの武器は買つうことができるからお金に余裕があつたら買つといこー！

ちなみに武器は強化することができるのー詳しく述べてくといよ。じゃあ次ね！」

俺はハーブに手を引つ張られ、道具屋、雑貨屋、宿屋などなど、色々な場所に手を握られたまま案内された。

「きょ、今日は色々教えてくれてありがとな。じゃあ俺は宿屋に泊まりに行くわ」

「ひからひを楽しかつたよーじゃあ明日ギルドでねー」ハーブはそう言って人ごみに消えていった。

「ハーブか・・・覚えておいつ「俺は宿屋を田描した。

田線：ハーブ

今日は面白い少年に出会つた。

私が悪戯でちよつと手を握つてみたら頬を真つ赤に染めてた。
なんだろ?「す」くかわいかつた。私、ちよつとあの人のこと好き
なのかも・・・

まあ、ちよつと案内しただけだし氣のせいよね。

明日一緒にクエストに行つてみようかな。ちよつと仮になるし。

「あー明日が楽しみだなー」そつそつぶやかき、私は家の中へと入つ
ていつた。

田線：広幸

「すいません。ちよつと今月、この宿に泊まりたいんですけど」俺
は宿屋の人につた。

え?なぜ、1ヶ月単位で泊まるかつて?そりやいつちのほうが安く

すむからだよ。

こういうのって、一田で泊まるのより、一ヶ月で泊まつたほうが少しだけ一田あたりの値段が下がるんだよね。俺はちょっとした節約をした。

「わかりました。では30000メイル頂戴致します。」

「げつ！高いな！・・でも一田なら1500メイル、つまり一ヶ月ではだいたい45000メイルってところだな。これなら15000メイルの得だ。これくらいは我慢しよう。」

「はい、どうぞ」俺は30000メイルを差し出した。

「確かにいただきました。ではこちらが部屋の鍵です。鍵をなくした際は、追加で5000メイル支払っていただきますので」「承お願いします。」

「はいはい」俺はそう言って鍵を受け取り、自分の部屋へと向かっていった。

「ここが俺の部屋か」

部屋はけっこう広かった。2ドアで、寝室にはベッドがあらかじめついている。

30000メイルでの部屋はなかなかのものだらう。

「明日から俺の異世界生活が始まるんだな」俺はベッドに横たわり田を開じた。

明日から俺の金稼ぎが始まる。ついでに、俺はつきあわしてしようがなかった。

残高 : 33000 メイル
収入 : 0 メイル
支出 : 30000 メイル
合計 : 3000 メイル

第3話 「俺、ギルドに登録する」（後書き）

感想・評価お待ちしています！
主人公の魔法、キャラクターなどのアイデアも募集しているので
何かあつたら是非お願いします！

第4話 採取クエスト『薬草納品』（4500メイル）（前書き）

今回は広幸の初仕事です。
ちょっと適当になつてしまいましたが勘弁してくださいww

第4話 採取クエスト『薬草納品』(4500メイル)

目線：広幸

気持ちのいい朝、昔の世界とは変わらずに俺はカーテンを開いた。少なくとも、こんな気持ちの悪い生き物が空を飛んでいなければの話だが。

「グエニニニ！」たくさんのドライゴンが飛び交っている。

「やつぱつ！」は異世界なんだよな、俺はドライゴンを見て「こいつが異世界なことを思い出す。

そう、この世界はRPGゲームでしか想像もできないような『魔物』が生息する世界なのだ。

俺はギルドへと向かった。今日が俺の初仕事なのだ。
そして俺はギルドへと到着すると、ボードを見始めた。

「まずは簡単そうなクエストからだな。」俺は採取クエストを探し始めた。

そう、採取クエストは比較的初心者向けのクエストである。
戦闘を避ける事だって可能なわけだ。俺の雑魚魔法では勝てる気がしないので俺はこの採取クエストを選んだ。

「ほつほつ、『薬草納品』か・・・割と簡単な仕事だな。
内容は？・・・薬草10kgで300メイル支払います、か。よしこのクエストにしよう！」

俺は薬草を採取するクエストを引き受けた。するとそこで聞き覚えのある声の女がやってきた。

「ヒロユキー！一緒にクエスト行こーー！」

「そう、そいつはハーブだつた。やばいやばいやばいやばい周りの男達がじーつと見ていく。

「どうやら嫉妬されてるようだつた。早く俺はこの場から逃げ出したい。

「お、おい、周りが見てるんだけど・・・」俺はハーブにしゃべりた。

「じゃあ早くクエストに行こうよーー！ナリナリなきゃ・・・泣いちゃうよ？」

ハーブは田をうるわしげに言つた。

「ぐつ！？・・わかつたわかつたから！・・泣くな！」俺は必死に言つた。

・・・ハーブめ、随分と卑怯な手を使いやがつて・・・
もしこんなところで泣かれては、俺がいかにも悪役と勘違いされてしまう。

もちろんハーブのことが好きな奴らは俺に襲い掛かるであろう。

「やつたー！ヒロユキとデートだあ！」ハーブは大声で言つた。
その瞬間、俺は周りから殺氣を感じた。どうやら誤解されたらしい。
でも今は誤解を解いている場合ではない。

俺はハーブを手を掴んでギルドから急いで飛び出した。

「・・・お前のせいだ大変な目にあつたじゃないか」俺はハーブに
言った。

「まあまあ気にしなくていいんじゃないかなー？」

「気にするよ！またギルドに戻つたら大変な目に遭いそうだ怖いよ！」俺は言った。

「それよりヒロユキ、なんのクエストに行くの？」ハーブは聞いてくる。

「わづだな、まずは安全なこの薬草採取のクエストに行こうと思つ」「よーし、それじゃあ出発ーーー！」

「ちよ、ちよ、ちょまでえええいいい！」ハーブは俺の腕を掴んで強引に引っ張つていった。

「！」が今回の場所か・・・俺とハーブは広い森へと来ていた。

この世界には色々な場所がある。
火山・氷山・洞窟・地下などなど様々な場所があり、
その場所に応じてでてくる魔物、強さ、クエストの難易度がかわつ
てくるのだ。

今回俺達は一番簡単な場所の、『森林』へと来ている。

俺は早速、図鑑を開いて出現する魔物を調べた。
どうやら出現する魔物は、

・ブルースライム

初期の雑魚モンスター。体で体当たりをして攻撃するが、ダメージはほほのだ。

産物：『青魔石』300メイル～3000メイル

・ゴブリン

初期の雑魚モンスター。手に持っている何かの動物の骨で攻撃してくれる。

ブルースライムよりは強烈だが、決して強くは無い。
産物：『ゴブリンの毛皮』 500メイル～300メイル

この2体ぐらいならしご。これなら俺の雑魚魔術でも撃退できるかも
しない。

まあ薬草田当てだから戦闘はなるべく避けるけどね。

「じゃあ私はどうすればいいー？」

「せうだな、とりあえず薬草を採取しまくつてきてくれ。

俺はちよつといいことを考へたんだ。」俺はハーブに指示した。

「わかつたよ！たくさんとつてくるからねー」ハーブは走り出して
いった。

「さてと・・・俺もとりかかるか」俺はニヤリと笑つてハーブと反
対方向へ向かつていった。

目線：ハーブ

私は今、ヒロコキとクエストにきてるんだ。

クエストはかなり地味なやつだけ、ヒロコキと一緒にならなんでも
いいや！

薬草もだいぶ集まつてきたし、ちよつと魔物でも倒してみようかな。

「あ、あんなどうじゴブリン発見ーー」私は腰につけていた剣を
抜いて接近する。

「アーリンはまだじつちに返付していくよによつだよ。

「チャンスー！」私は剣をゴブリンに振りかざした。

ゴプリンが襲い掛かってきた。私はもう一度剣を振りかざす。

「ゴブ・・・」ゴブリンは瀕死になつたんだよ。

「ヒヅめだー！」私はゴブリンの心臓に剣を突き刺した。

「やつたー！初めて一人で倒せたよ！」私は初めて魔物を倒したこ

しかし、そんな私先感動屯一瞬で壊れてしまつた。

「ゴブブゴブブ・・・」周りからゾロゾロとゴブリン達が現れる。一瞬で私はゴブリンに囲まれてしまつたの！

目線
：広幸

「美少女がピンチなら、助けに行くフラグが強制的に立つちまうんだ！」俺は痛感した。

ハーブになにかなければいいんだが・・・

俺はハーブのいる場所にたどり着いた。どうやらゴブリンに囮まれ

てこるらしい。

「ハーブ！助けに来たぞ！」

「ヒロコキ！ありがとー！」こつらなんてぶつ飛ばしちゃって……。その言葉は俺の心に突き刺さる。

「……『めん、俺の魔術、殺傷能力ないんだよね……』こつらなんて殺せないよ……」

「え……俺とハーブの間に沈黙が生まれる。

「ゴブゴブゴブ！」ギリヤービゴブリン達は俺に気付いたらしく、襲い掛かってきた。

「……ったく、やるしかないよな！ハーブ！ちょっと協力してくれ！」

「わかったわ！……何をすればいいの？」ハーブはゴブリン達を押しのけ、俺の方へやってきた。

「そうだな……周りの木を切り倒してくれ！」俺はゴブリン達の気をひきつけながら言った。

そして、俺の作戦が始まった。

「ある程度は切り落としたよ！」ハーブは息を切らして言った。さすがに4本もの木を切り倒すのはきついである。ハーブは俺の理想通りに切り倒した木で四角形をつくってくれた。

「よし。おつかれ。じゃあひつと離れておへんだ。」

俺もゴブリン達から逃げつつも色々と準備を終えていた。

俺はゴブリンをひきつけながら木でできた四角形の中におびき寄せた。

「今だ！炎の精靈よ、我的體にその力を示せ！ファイアボール！」

俺の手からチャーハンが炊けないほど炎の球が発射された。それと同時に、俺は木でできた四角形から外側に出る。

その球は「ゴブリン」に当たるのではなく、木へと直撃して引火した。

「ゴブゴブ？」あつという間に火は木から木へと移り、ゴブリンの逃げ場を完全に塞いだ。

「これでなんとかなつたな。とりあえず薬草集めて帰るか」俺は言った。

俺らは薬草を集め終わり、ギルドへと戻ってきた。

「これが今回の依頼の納品物です。」俺はフレアに薬草を渡した。

「おお、これは大量だな。ふむふむ・・・100万円こうじうか。よし、報酬だ！ありがたく受け取れ！」俺は薬草と交換で報酬金をもらつた。

100 ポンドで 300 メイル、
ハーブと山分けするので 150 メイルだな。なかなかの稼ぎだ。

「じゃあ帰りますね。」俺はギルドを後にしようとしました。

その時、「あんなにたくさん薬草で取ってきたのー?」とハーブが聞いてきた。

「おい、俺は金稼ぎのためならなんでもするんだぜ?」

薬草に似ている葉っぱを適当に入れといったからあんなに稼げたんだよ。」

「・・・最悪」ハーブに軽蔑的な目で見られてしまった。

そして俺はギルドを出る。その瞬間に俺は周りから殺氣を感じた。

「おい、お前、どうなるかわかつてんだよな?」

それは、男達だった。そうか、誤解はまだ解けていなかつたんだ。

「なんだこいつなるんだあああああああー!」

- - - 目線・ハーブ

ヒロユキはただのダメ人間だった。

薬草のかわりに変な草いれるし、まともな魔術は使えないし・・・

でも、助けにきてくれたヒロユキすつづくかっこよかつたんだよ! また今度も一緒にクエスト行けるといいな。

“ひつやー私、本当にヒロゴキのことが好きになっちゃったみたい・・・

残高：3000メイル
収入：1500メイル
支出：0メイル

合計：4500メイル

第4話 採取クエスト『薬草納品』（4500メイル）（後書き）

今度は討伐クエストを書いてみたいと思います。
その前にハーブの邪魔をする美少女キャラもだしてみたいけど・・・
感想・評価・お気に入り登録お待ちしています！

第5話 討伐クエスト『ブルースライムの宴』～前編～（前書き）

今回は2話にわけてみます。

一話一話は短いですが、内容を濃くしようと思っています

第5話 討伐クエスト『ブルースライムの宴』～前編～

目線：広幸

俺の荒稼ぎ生活2日目。まだ異世界には慣れていない。

俺は質素な食事（100メイル程度のやつ）を食べてギルドへと向かつた。

「なんかいいクエストないかな？」俺はギルドにつくなり、ボードを見始める。

その時、魔術師から電話がかかってきた。

「はい、もしもし」

「もしもし、私は。異世界生活は楽しんでいますか？」

「なんか稼ぎやすくて楽しいです。魔術が強ければもっとといいんですけど・・・」

「まあまあそれはしょうがないです。そこであなたの参考程度になればいいと思って電話しました。

まず、金を稼ぐために簡単なクエストをたくさんやるものいですけど、

討伐クエストをやってみてください。

採取クエストよりは難易度は高いんですけど、報酬が高めです。

そして、産物を獲得すると、それを売つてボーナス報酬もゲットできますし、

魔物を倒すことで、経験値的なのが溜まって魔力が上がりります。

つまり、強力な魔術を発動することもできるようになります。どう

ですか？」

「なるほど。確かに俺にとつての利益は大きいですね。
じゃあそします。では「俺はアドバイスをもらつて電話を切つた。

「じゃあこれで行くか」俺が選んだのはこのクエスト

『ブルースライムの裏』

- ・基本報酬 一体につき、500メイル
- ・産物『青魔石』 一個につき、500メイル

だそうです。

俺はクエストを受注し、ギルドをあとにした。

途中、雑貨屋に寄つて『イグリュスの羽』(500メイル×5)を
買つ。

→『図鑑データ』

イグリュスの羽。森林に生息するイグリュスの翼から入手した羽。
非常に油を含んでおり、ある程度の衝撃を『えると着火する。

俺は羽に衝撃を『えないようにして森林へと向かった。

森林に着いた。それと同時に俺は森のなかへと入つていく。

「ここはいい場所だな。」俺は森の中の広いスペースを見つけ出した。

え?何をしているかつて?簡単じゃないか。俺が普通に戦うとでも

思ってるか？

罠を仕掛けでスライム達を一網打尽にしてがっぽり稼ぐのだよ。

俺は早速は周りの草を大量に引き抜いた。

「草はOK。水の精靈よ、我的体にその力を示せ！ウォータードリル！」

俺の手から水洗トイレ並の回転力の水流ができる。

それで地面を削り、そこそこのサイズの穴を掘る。

そしてそこに、先程引っこ抜いた草と、イグリュスの羽を入れる。

この罠を1時間程かけて5つ作り上げた。

「さてと、罠は完成だ。それじゃあ奴らを集めに行くか。」俺は森の奥へと入つていった。

早速何体かのスライムを見つけた。

「ひやっほう！」俺はスライムに飛び蹴りを入れた。

当然ダメ人間な俺の蹴りの威力はほぼ〇だ。スライム様はどうやらお怒りの様子。

「グガガガギガ！！」その奇妙な鳴き声と共に、周りから大量のスライムが集まりだす。ざつと30体は超えたであろう。俺はその数に恐怖と歓喜の入り混じった複雑な感情を覚えた。

「やーいやーいバカ共が！こっちまで来いよー」俺は挑発しながら逃走した。

スライムたちは俺を追いかけてきてる。そのまま罠のところまで逃げ切れば俺の勝ちだ。

俺は気付けば小6並の足の速さから、中1並までと進化をとげていた。

・・・といつてもポツチャリ系の中1と変わらないが。

俺は遅いながらも必死に罠のほうへと走る。

そして、なんとか罠のところまでたどり着くことができた。

「百方！俺の勝ちだぜえええええ！」スライムたちは俺の後ろを追つてくる。

そして次々と罠に引っかかり始めた。

罠の場所に乗つかると同時に、羽が衝撃によって着火し、草へと引火する。そして、見事スライムの丸焼けの完成というわけだ。

あつという間に俺を追つてきたスライム達計30体は丸焼けになつた。

表面が焦げてボロボロになつてるが、産物を取るために切り開くと、中は生温かくてドロドロしている感じがたまらなく気持ち悪い。

とりあえず俺は、『青魔石』を10個ほど手に入れた。

そして、森林をあとにしようとした。

その時、空から巨大な魔物が現れる。

褐色の翼を持ち、尻尾が長く、くちばしのついている鳥と龍の混ざったような魔物だ。

しかし、俺はその翼に見覚えがあつた。

そう、この魔物は、本物のイグリュスだった。

第5話 討伐クエスト『ブルースライムの宴』～前編～（後書き）

続きは明日のお楽しみ♪　www
感想・評価・お気に入り登録お待ちしています！

第6話 討伐クエスト『ブルースライムの宴』～後編～（前書き）

今回で初めての討伐クエストの話は終わりです。
今回はあのキャラが・・・?つて感じです。

第6話 討伐クエスト『ブルースライムの宴』（後編）

俺がブルースライム討伐を終え、産物を取り出した後、ギルドに帰ろうとしたときに、あの褐色の羽を持つ龍の魔物『イグリュス』が現れる。

俺は果たして逃げられるのか！？

「グエニエニエニエニエ！」イグリュスは色々となぞめいた奇声を発した。スライムよりも気持ちの悪い声は、俺をイラつさせた。

「つたく、今はお前とやりやつてられねえんだよ」俺は青魔石を抱えながら逃走する。

すると、後ろからイグリュスが攻撃してくるのを見た。

「グエニエニエニエニエ！」イグリュスは翼を大きく広げる。すると、勢いよく回転し始め、羽を飛ばしてきた。

羽は途中で炎をまとい始めた。

あいつの羽は非常に油を含んでいる。そして空気抵抗により炎がついたのだ。

炎をまとった羽は俺に直撃する。

「つお……熱つ……」俺は羽に当たったが、致命傷は避けられた。しかし、炎は周りの草木へと移る。早く逃げないと逃げ場がなくなつてしまつ。

俺は青魔石だけは捨てずに、なんとか逃げようとした。

しかし、イグリュスは俺をしつこく追つてくる。

「グエエエエエエエエエ！」再びイグリュスは回転を始めた。回転の勢いは先程よりも増しており、かなりの羽を飛ばしてくるであろうと俺は考えた。

「これがラストチャンスだな」俺は燃えてない場所へと必死に走る。
しかし、あと一歩遅かった。

しかし、あと一歩遅かつた。

横で燃えている木が倒れ、俺の逃げ場所を完全に塞いだ。

「くつ！！万事休すか！」俺は奴の大量の羽の猛攻をあびて力尽きるのかと考えると、足の震えが止まらなくなつてしまつた。

しかし、俺の考えは単なる妄想にすぎなかつた。

「おい、新入り！なにしてんだ！早く逃げろ！」ずぶとい声が聞こえ、

俺めがけて飛んできた羽が全て凍りついた。

そして俺の目の前には大きな剣をかついだ、見覚えのある男が立つていた。

それは最初に俺がギルドに訪れたときに俺を殴ってきた奴、ペスカであった。

「お、お前はー!?

「「ひみせえー早く逃げろーっていつてんだよー」」ペスカは怒鳴った。

「あ、ありがとう。」俺は青魔石を抱え逃走した。

目線：ペスカ

「やつといなくなつたか」俺は剣をイグリュスへと構えた。

「グエニニニニー!」イグリュスは随分と怒つている。
翼を大きく広げ、勢いよくダイブしてきた。

「つたくよ・・・面倒だな」俺は剣を襲い掛かつてくる奴の顔面に
ぶつけた。

「グギヤアアアー!」イグリュスは痛みに絶叫した。

あいつの顔は凍り始めた。え?なぜそんなことができると?

俺の一番得意な魔術なんだが、『アイスブレイク』という魔術がある。

この魔術は簡単に言えば、自分の体から絶対零度に近い温度の冷気
を出して、

その冷気を武器にまとわりつかせて攻撃しているんだ。
だから武器に触れた瞬間にだいたいのものは凍りつく。

「グエニニニニー!」俺が説明をしているうちに奴は自分の翼を燃
やし始めて
氷を溶かしているようだ。

ちなみにイグリュスは翼全体を燃やし始めると、もうかなり弱つ
ている証拠だ。

それと同時にあいつも覚悟を決め、今まで以上に猛攻をしてくる。「ギヤアアアアア！」イグリュスは空へと大きく舞い上がった。その姿は、不死鳥を連想させる。まあ死にかけだから不死鳥というよりは瀕死鳥だけだ。

「グギヤアアア！」奴は俺のボケをスルーし、上空から一気に俺の方へ下降してきた。

「とじめだ！」俺は剣を飛んでくるあいつへと大きく振りかざす。剣が頭へとモロにヒートする。そして、イグリュスは動かなくなつた。

「よし、帰るか」俺は、イグリュスを抱き上げて、ギルドへと向かつていった。

目線：広幸

まさかあいつに助けられるとは思つてもいなかつた。

あいつは本当はいい奴なのだろうか・・・俺は疑問に思う。

「とりあえず後でお礼は言わないとな」俺は報酬金を受け取り、あいつの帰りをまつた。

ちなみに今回の報酬は、

基本報酬：15000メイル

産物報酬：5000メイル

だ。かなり上出来であろう。

「おう、帰つたぞ」そしてあいつは帰つてきた。イグリュスを抱い

で。

「おお！これは大きいイグリュスだな！」周りの奴らがペスカにたかる。そいつらを蹴散らしながらペスカは報酬金をもらいにきた。ざつと見たところ、一万メイルくらいはあつた。猛烈に金がほしくなつた。

しかし、俺はそんな恥ずかしい感情を押さえ込み、お礼をした。

「さつきはありがとな。」

「気にするな。あいつは俺の獲物だった。そこにお前がいて邪魔くさかつただけだ。」

やはり「こつは一言一言ムカつくやつだ。しかしここは大人になろう。

「ああ、お前のおかげで助かつたよ。本当にありがと。」

「べ、べ、べ、べつに気にするなど言つてるだろ！」少しペスカの顔が赤くなつてゐる。

「い、これは、お、お前の入団祝いの、プ、プレゼントだ！」
そう言つてペスカは1万メイルを差し出してきた。俺はものすごく興奮した。

「本当にくれるのか？」

「ああ。お、俺の目的はイグリュスの素材だしな。」・・・嘘が下

手なやつめ。

「あらがとう！今度は一緒にクエストにこうなー。」

「あ、あの、俺、俺はお前のこと気に入ったわけじゃ・・・」

俺は最後までペスカが喋り終える前にギルドを後回した。

「あいつ・・・結構いい奴じゃないか」俺はちょっと嬉しかった。

目線：ペスカ

やつぱりあいつは色々とおかしい。

人の話は最後まで聞けよつづーの。

でも、俺は少しあいつのことが気に入った。

ん？なぜかって？それはだな・・・あいつには何か他の奴には無いものを感じる。

あの戦い方、普通の奴ならまず考え付かないだろ。でもあいつはそんなせこい手を使ってスライムを一網打尽にしていた。

あいつはもの凄く頭のキレる奴だ、と俺は考えたんだ。

今度一緒にクエストについて観察してみるのも面白いかもな・・・

残高：4500メイル
収入：30000メイル
支出：100メイル

合計：34400メイル

第6話 討伐クエスト『ブルースライムの宴』～後編～（後書き）

どうでしたか？

感想・評価がもらえたりするとかなり嬉しいです。
めっちゃ 小説頑張りたくなります。

できれば感想・評価・お気に入り登録してもらいたいです。
てかしてくださいwwお願いします！！

第7話 討伐クエスト『ゴブリン撲滅運動』～前編～（前書き）

今回も討伐クエストを入れてみました。
そろそろハーブもだしたほうがいいのかな・・・

第7話 討伐クエスト『ゴブリン撲滅運動』～前編～

目線：広幸

荒稼ぎ生活3日目。俺は、かなり昨日頑張って稼ぎまくったため、今日のご飯は奮発することにした。もしかしたら人生初の贅沢なかもしれない。

本日のメニューは魔物の肉、かなり栄養価の高い野菜、炭酸ジュースという豪華な物だ。

ちなみに今日のご飯には3000メイルを注いだ。これだけあつたら一ヶ月は持つ食費なのに。

「びやあ、あ、あうまひい、いい、」

俺はあまりにも興奮してしまい、マオさん的なものになってしまった。

さあ、俺はひと時の幸せを味わった後、また今口も荒稼ぎへと行くのだ。

「さてと・・・なんかいいクエストないかな・・・」

俺は討伐クエストの中でも簡単そうなのを選ぶ。いつか魔力が格段を上がり、チートキャラになることを信じて。

この頃ハーブには会わない。一体どこで何をしているのだろうか。少しだけ、いやかなり気になります。尋常じゃないです。

「お、このクエストならちょっと難易度も上がつていいかもしねないな」

俺がそう言つて受注したクエストは、『ゴブリン撲滅運動』だ。

（クエスト説明）

最近、森林に大量のゴブリン達が現れて、森の木を無差別になぎ倒しているようだ。

このままではせっかくの森林の大切な樹木がなくなつてしまつかもしれない。

だからできるだけ多くのゴブリンを倒してくれ。報酬は多く支払う。

- ・基本報酬 ゴブリン一体 × 1000 メイル
- ・産物報酬 ゴブリンの毛皮一枚 × 800 メイル
- ・物品報酬 薬草 × 10 個

あ、ちなみに物品報酬というのは、クエストを完了した後に依頼主からもらえる物品のことだ、

アイテム、素材、装備品、魔術書（魔術を習得するのに必要な本）などなどがもらえる。

「よし、そうと決まれば罠の準備だ」俺はギルドを後にし、雑貨屋へと向かっていく。

言うまでもないが、魔術が強くならない限り俺はせこい手しか使うつもりはない。

しかし、今回のクエストはちょっと厄介な点がある。

ブルースライムの産物は内臓にあるためボコボコにしても構わないが、この「ブリンの産物は毛皮だ。そう簡単に傷つけると引き取つてもられないだろ?」

「今日は……とりあえずピアノ線が欲しいところだな。」

俺は雑貨屋でピアノ線（50mにつき700メイル）と、電熱線（50mにつき700メイル）をそれぞれ50m買ひ、これで準備は整つた。

「早速出発だ！」俺は張り切つて森林へと向かつた。

森林は確かに以前よりも木が減つていた。環境破壊はよくない、と俺は思った。

早速森林の奥へと足を踏み入れると同時に、電熱線を手袋の上から右手に巻きつけ始めた。

あ、ちなみにこの手袋は、この前一緒にハーブとクエストにいった時に、プレゼントとしてもらつた。どうやらお揃いらしい。まあそんな余談はおいといて、俺は一重に履いた手袋の上に電熱線を巻きつけておいた。

そしてそれが完了すると、ピアノ線を2本の高い木の一番高いうところの間に45m程、蜘蛛の巣のように巻きつける。その木はもうかなりボロボロで、簡単に折れるが重量感があるという性質があった。

そしてピアノ線の残りの5mくらいを他の一本の木に巻きつける。その木の根元を掘り起こしておいて、少し跳る程度で倒れるようにしておいた。

これで全自动カッター機の完成というわけだ。

ゴブリン達が俺を追つてきてその蜘蛛の巣トラップの場所へとやつてくる。

その瞬間、俺は木を思いつき蹴る。

蹴られた木は倒れ、その木の重みで2本の木は衝撃に耐えられず折れる、はずだ。

すると、奴らの頭上に折れた木とそこへ巻きつけられていたピアノ線が落下してくる。

重量感満載な木のおかげで、落下スピードはとても速くなり、一瞬で奴らの頭をぐちょぐちょに・・・おつとこれ以上は想像にお任せしよう。

そんな恐怖の拷問器具のよくな房が今完成した。

誤つて自分がその罠に引っかかると間違いなく、即死 異世界生活終了である。

俺は絶対にミスをしないと誓い、ゴブリン達をおびき寄せにせりて深部へと向かつた。

「うやうやしくゴブリン達は集落を形成して生活しているらしい。だったらゴブリン達をかなりお怒りにさせる手段は一つ・・・

「炎の精霊よ、我の体にその力を示せ！ファイアボール！」俺がそう言い放つたと同時に、左手に炎の球が形成される。その球を、俺は一番大きな家へと飛ばした。

そう、今俺がしていることは放火だ。

住み心地よい住まいが無くなってしまつどんな動物でも悲しいである。

その原因を作ったのが俺なのだから、絶対に俺を殺そうと追つくるはずだ。

俺はそれを狙っていた。そして、ぞくぞくとゴブリン達が家から急

いででてくる。

俺は魔術を使い、放火を続けた。ビーヴィー!ゴブリン達は俺が放火してこることに気付いたらしい。

「ゴブゴブゴブゴブ!」ゴブリン達は一斉に俺の方へと走ってきた。ガリガリ20体くらいであろうか。なかなか上出来じゃないか。

俺は罠の方へと走り出した。ゴブリン達はなかなか足が速い。じわりじわりと、俺とゴブリンの距離は近くなつていった。

「うおおおおおおお!」俺はなんとか罠のところまで逃げ切つた。

走ってきた勢いを利用して、罠を始動させるための木を蹴つた。

木に俺の脚が当たつたと同時に、木はゆっくりと倒れ始めた。そして、その木の重みで、2本の木が折れる。そして蜘蛛の巣のようになつたピアノ線が落ちてくる。

「ゴブ?」ゴブリン達は上を見上げた。そして罠に気付いたらしく、逃げようとしている。

しかし、ちょっと気付くのが遅かった。

ゴブリンの頭上にピアノ線が落ち、ゴブリンの大半はピアノ線により体を切り裂かれ、

口では表現できないようになつてしまつた。（自主規制により、リアルには表現いたしません）

しかし、3体程のゴブリンは罠を回避したらしく、ピンパンしていくる。

「やれやれ・・・もう一つの罠を使つ」になるとば・・・できれば今の罠で即死してもういたかつたんだが「俺は生き残つてしまつた」ゴブリンに同情した。

しかし、俺だってこの異世界で生き抜くためならどんな手段も選ばない。

「いぐぜええええええ！」

第7話 討伐クエスト『ゴブリン撲滅運動』～前編～（後書き）

今回は主人公の作る罠を考えるのが大変でした。
感想・評価お待ちしています！
あと、主人公の仕掛ける罠でいい案があつたらアドバイスください
！

第8話 討伐クエスト『ゴブリン撲滅運動』～後編～（前書き）

今回は後半戦です。

暇は多少適当な気もしますがご勘弁を・・・

第8話 討伐クエスト『ゴブリン撲滅運動』～後編～

「いくぜえええええええ！」俺はゴブリンの方へと走り出した。

「ゴブブ！」ゴブリンは手に持っている尖った骨で殴りかかってきた。

「危ねえ！」俺は骨が体に当たるギリギリで回避した。

そしてそのまま他のゴブリンも華麗に避け、先程の罠のところへ行く。

「これなら使えるな」俺は罠に引っかかり、表現できないほどグロテスクなものへと豹変してしまったゴブリンの持っていた骨を頂戴する。その骨も先が鋭利になつており、皮膚に傷をつけることはできそうだ。

俺はゴブリンから逃げながら、その骨に、電熱線を巻きつける。そして、俺の手と骨は電熱線を通してつながっている状態へとなつた。これで準備完了だ。

「ゴブゴブゴブ！」ゴブリンは一気に飛び掛ってきた。

「うおおおおお！」俺は尖った骨を一体のゴブリンの胸部に突き刺す。

「ゴブ……」ゴブリンは痛みに苦しんでいる様子。その間に俺はゴブリン達を囲むように周りをグルグルと回り始める。

え？何をしているかって？・・・今俺は、ゴブリンに電熱線を巻きついているんだよ。

そして、今からじわりじわつとここからを苦しめていくんだよ。

電熱線を巻きつけられたゴブリン達は身動きが取れなくなつた。そこで俺は魔術を発動する。

「雷の精靈よ、我的体にその力を示せーイナズマアローー！」

俺の右腕に雷がまとい始める。ちなみに魔力が上がって、今では乾電池3本分まで進化した。

その雷は矢を形成するのではなく、電熱線へと流れていった。電熱線は電気が通ると、熱を帯びる。いくら乾電池3つ分でもそこそこの温度にはなるであろう。

しかし、電熱線を巻きつけている俺の手もやけどしてしまう。

そこで俺はハーブから貰つた手袋を二重にして装着したのだ。これならやけどは避けられる。

手袋をしていても、電熱線が熱くなつていくのを感じた。

それと同時に、「ゴブゴブゴブーーー」というゴブリン達の悲鳴が聞こえ出す。

手袋をしてても熱が伝わつてくるんだ。奴らは相当熱いであろう。

ちなみに俺が電熱線を選んだのには理由がある。

それは、ゴブリンの毛皮をあまり痛めたくないからだ。

第一の罠では体が引き裂かれるだけで、毛皮としての価値を十分に残すことができる。

そして電熱線は、炎の魔術と違つて毛皮を焦がしてしまつ可能性はかなり少ない。

多少傷はつくかもしけないが、価値はそこまで下がらないで済むだろい。

そういうしてこむつむ、ゴブリン達は氣絶してしまつた。これでクエスト終了だ。

俺が今回倒したゴブリンの数は30体。今日は綺麗に倒せたということで、全ゴブリンから産物である毛皮を剥ぎ取れた。

そして俺は産物を抱え、ギルドへと帰つていった。

「これが今回の報酬です。」 そう言われ、俺が渡された茶封筒の中に

基本報酬	ゴブリン × 30体 = 3万メイル
産物報酬	ゴブリンの毛皮 × 30枚 = 2万4000メイル

計 5万4000メイルが入つていた。かなりの高額であろう。さらにそれと別に家に物品報酬である薬草が届くらしい。

俺は報酬額を見て飛び跳ねていると、ハーブが現れた。

「ああー・ヒュウキ～何そんなに喜んでるのー？」

「おお、さつさつゴブリンのクエストに行つてきてね。

それで今回の報酬があまりにも高かつたもんで喜んでいたのさ。俺はお金を見せた。

「わあーーーす、お金だあーーーいつなつたら明日またデーターを行

こうね

でたぞ・・・ハーブの人を困らせる発言。このせいで俺は殺されか

けたのである。

そして今も周りから冷たい視線を浴びる。めちゃめちゃ背中が痛い。

「……俺は無言であった。そこにハーブの追い討ちが来る。

「……ダメ?」ハーブは必殺技の上田遣いを繰り出してきた。これには俺も逆らえない。

「わかったよ! いけばいいんだろ! いけば!」俺はもうやけくそになっていた。

「やつたあ! じゃあ明日10時にギルド前集合ね!」そう言つてハーブはでてしまつた。

「はあ……俺の給料があ……俺は自分の発言に後悔した。そこに殺氣が近づいてくるのを感じた。

「おい、ちょっとといいか……?」それは、ギルド中の男達であった。

また俺はこの男達に恨まれて、精神も肉体もボロボロにされてしまうのか……

「い、いやだああああああ!」ギルド中に俺の悲鳴が響いた。

目線：ハーブ

今日は久しぶりにヒロコキとあった。

最近はクエストが忙しくてずっと会えなくて寂しかったんだよ。

だから明日は精一杯楽しみたいな！クエスト以外での初デートだもん！

・・・って私、まだヒロユキと付き合ってないのに・・・
明日には思いを伝えられるとといなーってか明日、絶対に思いを
伝えるんだから！

田線・魔術師ロウ

どうやらヒロユキ君の事を好きになってくれた人ができたようですね。

彼はこの世界にきて新しい人生を歩み、生きることの素晴らしさを感じてくれたでしょうか？
感じてくれると私も転生した甲斐があります。

まあ、まだまだ異世界生活も始まつたばかり。これからも頑張つてもらいますよ。

明日のデートの様子、楽しみにさせてもらいますね。

残高：3万4400メイル
収入：5万4000メイル
支出： 4400メイル

合計：8万4000メイル

第8話 討伐クエスト『ゴブリン撲滅運動』～後編～（後書き）

次はデーターの話です。

なにカリクエストあつたら気軽に言つてくださいー！

転生前の世界での出来事【玉籠】（前書き）

幕間で好きなものにしてみたかったので
こつち側にもつてきました！

本編とは関係ないですが、見ていただければありがたいです。

転生前の世界での出来事【出勤】

「俺の初出勤。俺は過去ずっとA-L-L-Eなダメ人間で、社会に受け入れられるとは思っていなかつた。

そんな俺にもとうとう仕事が決まつたのだ！」

「行つてきまーす」俺は朝食を食べずに、いや、正確には食べるものが無かつたので食べずに家をでた。もちろん一人暮らしだから当然さつきの「行つてきまーす」の返事は返つてこない。

俺は勉強面だけでなく、運動面、人間性その他もうもうがありえないほど残念なのだ。

当然彼女もいるわけなく、さびしい生活を送つてている。

「よーし、会社で新しい出会いをするぞー！」俺は無駄な妄想をしながら会社へと向かつた。

この時、俺は会社が超ハードブラックなことを知ることも無かつた。

「(会社)が例の会社だな。よし、きりりと挨拶をせねば」俺は服装をピチっと決め、

会社の中へと堂々と入つていった。

「今日からここで働かせていただくことになりました！斎藤広幸です！」

「一生懸命働きますのでこれから宜しくお願ひします！」

入るなり頭を深く下げる。これで掴みはバツチリなはずだ。

「あれ？ 何も反応ないぞ？」

俺はそう思いながらゆっくりと頭を上げた。

するとそこには、俺以外にふとった社長らしき人間と、従業員一人しかいなかつた。

「ノオオオオウー！」俺は今まで描いていた妄想をぶち壊されたため、発狂した。

「ああ、君が新人ね。早速仕事にとりかかってもらつから。」
「座つて」

社長らしきテブが言つ。そいつが指差したのはみかん箱だつた。

「あ、あの・・・」れ[冗談ですよね？]

「いやいや、真剣だよ。ほら、早く座つて。」
「コレ今日中に仕上げで
ね」

俺が半ば強引に座らさせられると、みかん箱の上に俺の身長並の高さの山積みにされた紙が乗せられた。これを今日中に仕上げるといふらしき。

「ちよつと・・・正氣ですか？みかん箱潰れちゃつてますけど・・・

「

「いやいや、真剣だつてば。じゃあ宜しく」

そう言つて社長は自分の席（みかん箱2つとこりよつとグレードの上がつてゐやつ）に戻つた。

「はあ・・・やっぱりこんなとこりだつたのか・・・」俺はしようとがなく仕事にとりかかる。

これからこの紙と永遠に戦いを繰り広げていくといふのかと憚り、俺は泣きたくなつた。

16 時間後

「つふー・・・せつと終わったし・・・」俺はせつとの想いで仕事を終えた。

気付ければ、従業員らしい1名はもう仕事を終え、帰つてしまつたらしい。

せりはう事に貰われると、隣もおへなるがうだ。

「よし、よく頑張ったな。今日は帰つていいくぞ」テープは言った。

「はい・・・さよなら・・・」俺は人生に絶望しつつも、家へと帰つていつた。

それから俺の死闘が始まつた。

毎日山積みにされる書類を仕上げる。これで16時間はかかる。もちろん、休憩なんてものは無い。そんなことをしている時間がもつたらない。

そして・・・ついに給料が手に入つた。

「今月はよく頑張ったね。これが給料だよ」俺はテブから茶封筒をもらつた。

「よっしゃああああああ！これで俺も大金持ちだ！」

俺はいままでの辛せが一気に吹き飛ぶよつた気がした。

俺は恐る恐る中身を見る。

そこにてきたのは・・・・

「2500円って・・・なんじゅこつやあああーー・・・

俺が仕事恐怖症になつた瞬間であつた。

転生前の世界での出来事【玉勤】（後書き）

他にもリクエストあつたらお願ひします！

転生前の世界での出来事【パン屋と俺】（前書き）

「こつも場所変えです。
面白くはないと思いますが見ていただけるとありがたいです。

転生前の世界での出来事【パン屋と俺】

異世界に転生される前の俺には魔術を使えるような能力は無く、言えばただのダメ人間だった。

そんな俺は現在、ハードブラック会社で得体の知れない書類を仕上げる。

こんなもの一体何に使うのだろうか、とつぶづぶ思つてはいるが社長は答えてくれない。

そんな俺にも昨日給料が入つたのだ！・・・高校生のおじつかいより少ないが・・・

「やつぱり毎日食事はしたいよな。でも一ヶ月をこの金でしのぐのは・・・」

俺は半分あきらめていた。しかし転職するあても無く、もしも今の会社を辞めたら俺の給料が高校生のおじつかいから0までという大きな変化をとげてしまう。

「とりあえず、何に金を使うかを色々まとめてみよっか」

俺は一ヶ月をこの極端に少ない収入で生活する方法をまとめてみた。

「一ヶ月で必要な物資を買つ場合」

水道代

本来ならちゃんと水を使いたいところだ。しかし、こんなことにお金を使つてはいる余裕は無い。

「公園の水を使えば問題ないよね」俺はまず一つの壁を乗り越えた。
水道は使わなくても生活していくんだろう。

ガス代

これも生活の上ではまず欠かせない存在だろう。しかし、俺には金の余裕が無い。

「ガスは必要ないな。ガス使うもの買わなければいいんだし」また俺は壁を乗り越えた。

しかし、これで大幅に食事の選択肢が減つてしまつた。セロリとかしか買えないだろう。

電気代

これはマジ必要。コレが無いならもう生活じゃねえええ！…って感じなものだ。

しかし、今の俺に電気代なんてものは払えない。
「いらないよなー。だって仕事から家に帰つてきたらもう寝るしあ、あとレンジとかも使わなければいいんだよな」

電気代を0円にするにより、加熱という選択肢は無くなつた。
更に冷蔵庫も使えないでの、食材の保存もできなくなつてしまつた。

食費

これだけは乗り越えられない壁である。俺が人間である限り避けて通れないものだ。

「よし・・・これに全額を注ぐしかないよな」俺は確信した。

しかし今までの節約により、加熱、長期保存という選択肢が消えた。
「もう俺にはセロリと共に生活するしか選択肢はないのか・・・

俺があきらめかけた時、一筋の光が見えた。

「パ、パ、パ、パンの耳ならもうえる…！」

そう、パン屋では大概はパンの耳を捨てたり、お客様にあげるものだ。

つまり、そのパンの耳を貰う事ができたら食費は〇になるかもしないのだ。

しかし、この作戦には難関がある。

それは、パン屋のパンの耳を『貰える条件だ。

一番嬉しいのは、パンの耳をただで好きなだけ持つていいと言つてくれる店だ。

これならその店に暫くは寄生できる。

一番田は、一つだけだぞ、って言つてくれる店だ。

この店のパターンなら一口分は確保できるであらう。

しかし、次から貰える見込みは無い。だから一度きりと考えるのが無難だらう。

そして最悪のケースは、「あーすいません、パンの耳はパンをお買い上げの方に1個差し上げるつていうシステムになつてているんですよ」だ。

これがきたら、「やっぱこいです」つてこいつことが精神的にできなくなつてしまつ。

つまり、強制的にパンを買わないといけないフラグが立つてしまつんだ。

「とりあえず大まかな作戦は立てられたな。明日から実行だ！」
俺はとりあえず寝ることにした。

「今日は決戦の舞台だ！」俺は公園でトイレ・水分補給を済まし、決戦の舞台へと舞い降りた。

「いらっしゃいませ。」無愛想な男の店員が言つ。これはかなりの難関かもしれない。

しかし、後には引けない。まずは店員を『よくしゃせぬ』とからだ。

「あなたのつくつたパンつてありますか？」

「・・・メロンパンです」無愛想に言つ。

「あーこれ凄くおいしそうですねー」の焼き加減、表面の『げ真合』、香り・・・

全てが完璧ですよー！」

「やつぱつそつ思ひますか！」先程までの無愛想な店員がまるで別人がのように変わった。

それから、俺は店員と1時間以上メロンパンについて話をした。ここいらへんで交渉してみてもいいんではないのか、と思い俺は話をきりだす。

「ちょっとお願ひがあるんですけど・・・」

「なんですか？」彼は目を輝かせている。これはチャンスだ。

「パンの耳を分けていただけませんか？」

「・・・・・・・」

「あ、あの・・・」

「帰れ！・・・」

「ひいいい！すいませんでした！」俺は急いで外へようとする。
その時、店員が俺の腕を掴んでそっと袋を渡した。

「何も言わずに立ち去れ」

その中にさ、大量のメロンパンが入っていた。

「あ、ありがとうございます！」

こうして俺の収穫祭は幕を閉じたのである。

俺、メロンパン好きじゃないんだよね・・・

P · S

転生前の世界での出来事【パン屋と俺】（後書き）

感想・評価お待ちしております！

第9話 「俺、人生初の恋愛体験」（前書き）

今回はハーブがヒロユキに告白しちゃう話です。
結ばれるべきか・・・結ばれないべきか・・・
まだ結末考えてません！

第9話 「俺、人生初の恋愛体験」

目線：広幸

俺は昨日、荒稼ぎをした。それをハーブに自慢したら、デートに行くはめになってしまった。

「せっかくの金があ・・・」俺は今日の朝食は贅沢しないで、この前の報酬でもらった薬草を食べていた。（あ、ドレッシングとか無いからめっちゃ苦いよ）

そして俺は約束通り、重い足を動かし、ギルドへと向かった。

「もうー遅いー！」ハーブは約束時間まであと10分もあるのに、ギルドに来ていた。

もちろん、俺は周囲から冷たい視線を浴び続けている。

「は、早くいこうぜ・・・ここはダメだ！」そつそつて俺はハーブの腕を掴んで、ギルドを後にした。

ちなみに俺達が今向かっているのは、『ガルダス』という街だ。

その街はなんと言つても魔術書が大量に発行されている場所であり、初心者魔術から精霊などの扱う大技魔術、補助魔術・回復魔術など幅広いジャンルの魔術書が雑貨屋に置いてあるのだ。今日お金に余裕があつたら買うことにしてよう。

・・・まあ、余裕があるとは思えないんだが・・・

そつそつとはハーブは雑貨屋にある、ブレスレットばかり見ていく。

ちなみに額は、3万メイル前後である。ありえないほど高い。

しかし、これだけ高いのには理由がある。

ここにあるブレスレットは、全て『魔法石』から形成されておるのだ。

ちなみに図鑑によると、魔法石というのは魔物の体で偶然できる石で、石には魔力が込められており、装備している者の魔力を増大させることができるものらしい。

あと、強い魔物であればあるほど魔法石に込められている魔力が大きくなるのだ。

もちろんその魔法石の方が値段が高いのだが……

「ヒロユキーこのブレスレットが欲しいんだけどおー」
ハーブが指差したのは赤い魔法石でできたブレスレット。イグリュスの魔法石らしい。

値段は・・・4万メイル。一つ買うと7万メイルらしい。

「無理だ。そんなに俺も払えないわ！」俺はこればかりはキッパリと断る。

「・・・・ダメ？」またもやハーブの上目遣い。俺の心は一瞬揺らいだが、決意は変わらなかつた。

「ダメだ！」俺はもう一度断つた。

「ええーお願ひー」ハーブは俺に抱きついてきて言った。

その時に一つの柔らかいものが俺の肌に当たる。その瞬間俺の心は折れた。

「・・・しょうがないな。今回だけだぞ」・・・といつも言つてしまつた。

「やつたあー！じゃあ一つお願ひします」そうハーブは言つて、店員にブレスレットを渡した。

「ちょーーー！」ついだろー！」

「ダメだよー！こいつちの方がお得だしーそれに・・・

「それに？」俺は聞き返す。

「やつぱり・・・お揃いの方がいいもん！」ハーブは頬を赤くして言つた。

その瞬間、俺の興奮ゲージがMAXへ到達し、危うく失神しそうになつた。

しかし、会計をすると同時に俺の興奮ゲージが〇にまで落ちた。

「お会計、7万メイルになります」

「・・・」俺は無言で大金を支払う。このお金渡す時間がとてつもなく辛い。

俺は金を支払い終えた後、雑貨屋を急いであとにした。もしこれ以上雑貨屋の中にいて、またハーブが欲しい物を見つけたらおしまいだからな。

「やつたあーー！ヒロユキとお揃いだーー！」ハーブはブレスレット

を腕につけていった。

もちろん俺も強制的にブレスレットをつけることになる。
まあこれをつけることによって魔力が上がるから悪くは無いよね。

そんなこんなで俺は全財産の90%ちかくを失った。

しかし、その後もデートという名の金の無駄遣いは続いた。
遊園地の中へ行き、クレープを食べたり、観覧車に乗つたりなどなど…

結局夕方になつた頃には、俺の全財産が40000メイルにまで減つていた。

「ヒロユキー今日はありがと!」ハーブはにっこり笑つて言った。
その笑顔を見た瞬間、8万メイルの支出が屁でもないようと思えてしまつた。

「俺も楽しかつたよ。また今度行こうな。」もちろん、社交辞令だ。

「うん!・・・ヒロユキ、私言いたいことがあるの!..

「ん?なんだ?」

「あ、あの・・・そ、それは・・・」ハーブの顔がだんだん真つ赤になつていぐ。

「どうした?熱でもあるのか?」やはり俺は恋愛経験0だ。
後から考えてみると、自分でも有り得ないほど鈍感だな、つて笑えてくる。

しかし、まだ俺はハーブの言おつとしていることがわかつていなかつたので、こんな簡単なことにも気付けなかつた。

「ヒロユキは、ハーブのことばつと思つへ、ハーブは田をそらしながら言つてきた。

「普通に、好きかな」この時、俺はハーブのことを友達として好きと言つたんだ。

しかし、ハーブはそれを別の意味でとらえたらしい。

「ハーブをヒロユキのことがすき…だから付き合つてください…！」

「…え？」俺は聞き返した。

「いや、付き合つてほしいって言つてるだけだよ」ハーブの顔はまだ真つ赤だ。

「…ちょ、ちょいちょいちょい…え？罰ゲームかなんか？」

俺は思わず疑つた。それもそのはずであつ。

俺はルックスは中の下、頭はとてつもないバカ、運動音痴、恋愛経験0で、

自分のためなら手段を選ばないダメ人間の代表だぞ。それがこんな美少女を付き合える筈がない。

「ハーブはいつも本気だよ！ヒロユキは確かにブサイクだし、バカだし、鈍感だし、運動音痴だし、恋愛に対してもかなりのチキンだし…でも…」

頼む…もうやめてくれ！俺のガラスのハートがもうボロボロだ！

「でも…すつぐくやさしい人だと思う！だって7万メイルもするプレゼントを普通の人なら買わないよ？それにヒロユキは貴族なわ

けでもない、でもハーブのために買ってくれるなんて凄く嬉しかった。
だからハーブはヒロユキのことが好きになつたんだ……どうかな
？」

「わかつた……気持ちは嬉しいよ。でも、もう少し考えさせてく
れないかな……」

俺は恋愛経験のだもん。本当にハーブを幸せにできるか……」

「……わかつた！じゃあ明日聞かせて！」ハーブはそう言って走
つて帰つてしまつた。

そりや恥ずかしかつただろうな。帰つちゃうのも当然だ。

「俺は……」俺は歩きながら考えていた。
自分みたいなダメ人間にハーブを幸せにすることができるのか？
自分みたいなダメ人間がハーブと付き合つてもいいのか？
俺は、自分がダメ人間に生まれてきてしまつたことに後悔した。
もしも、ダメ人間じやなかつたら答えなんて迷わない。
もしも、ダメ人間じやなかつたらハーブを苦しめることはない。
もしも、ダメ人間じやなかたらこんなにも自分に落胆することもな
い……

「やつぱり俺は……」氣付くと俺の家の前だつた。

そして、俺は決断をした。明日ハーブに本心を明かす。そう決めた。

目線：ハーブ

本当に告白しちやつた……やつぱり恥ずかしかつたな。

きっとヒロユキはいきなり驚いてると想つ。そして、もの凄く悩んでいるんだと思う。

本当は言いたかったんだ。ヒロユキはダメ人間なんかじゃないって。ハーブがゴブリンの群れに襲われた時も、弱いくせに助けにきてくれた。

今日だって、ハーブを楽しませようと一生懸命だった。やつぱり、ヒロユキはすっごく優しいよ。そんなヒロユキが一番好きなんだ。

・・・・だから、明日またちゃんと返事してよね・・・

残高：8万4000メイル

収入：0メイル

支出：8万メイル

合計：4000メイル

第9話 「俺、人生初の恋愛体験」（後書き）

書いててハーブがかわいいと感じてしまった・・・
感想・評価お待ちしています！

第10話 討伐クエスト『炎翼龍の飛翔』～その1～（前書き）

今回は大型の魔物討伐の話です。
いい跟考えようとしたんだけど残金があれだつたんでパスします！

第10話 討伐クエスト『炎翼龍の飛翔』（その1）

目線
・
広幸

俺は今日、ハーブに自分の思いを伝えるつもりだ。

それがどんな結果にならなか
るのだから。
後悔にしない
それが俺の決めた道

そして俺にはもう一つな重大なことがあつた。

どうやら俺のクエストの成績がなかなかいいらしく、上級魔物の討伐クエストを受ける権利が与えられたのだ。

うな恐ろしい魔物は討伐しない。

今回は、ギルドに入団したら絶対に超えなくてはならない壁である

ちなみに『炎翼龍』といつのは、イグリコスの別名です。

このクリエストをクリアする限り、俺のガルデーベルが上がるらしい。

セナミは今俺は1た 1といふのは二回通を計付する程度のク
エストしか受けられない。

九二：无攸利，无咎。

アすれば俺も2にあがれる。

「それで今まで以上に収入も上かるといふわけだ。」
「それにおもしろい話だね、うん。

あ、あとのこのクエストには条件がついているらしい。

どうやら連れて行けるのは同じレベル以下の奴だけらしい。だから

俺が連れて行けるのは・・・

ハーブくらいであろう。もし一人でクエストクリアしたら、ハーブもレベルが2に上がれるらしい。

都合良く、ハーブはギルドにいた。

俺は一緒にクエストやらないか？（いきじ風）と言つてみた。

「やつたー！私もちょうど受けたかったんだけど・・・一人じゃ難しそうだつたからできなかつたの。

でもヒロユキと一緒にならうれしいな！・・・あ、あと昨日の返事を教えてね」

「ああ、分かつてゐるつて。このクエストが終わつたら俺の思いを言うから。」

俺は言い切つた。しかし、この言い方では死亡フラグが必然的に立つてしまつた。

そんなものへし折つてやるううう！・・・すまん、また取り乱した。

「じゃあクエスト行こうか。ちょっと準備してくるから待つてて」
俺はハーブにそう言つて雑貨屋へと向かつた。

目線：ハーブ

今日は楽しみだな！ヒロユキとまたクエストに行けるなんて・・・

でも、一番樂しみなのはヒロコキの返事だよ。
「あー早く帰つてこないかなー」私はそつそつとやきながりヒロコキ
の帰りを待つていた。
あらめないんだから。

田線：ヒロコキ

「あー早く帰つてこないかなー」私はそつそつとやきながりヒロコキ
の帰りを待つていた。

「あー早く帰つてこないかなー」私はそつそつとやきながりヒロコキ
の帰りを待つていた。

「まずは・・・これとこれと・・・あ、あとこれが必要だな。」

俺は、瞬間接着剤（250メイル×4）と鋸びた鉄の剣（1000
メイル×2）を買った。

それと、・・・を買った。これはまだ明らかにはしないでおこ
う。

ちなみに俺が鉄の剣を買った理由は、昔は友達と格闘したこともあ
つて、

友達はなかなかお金持ちで、メリケンサック、プラスチック製のバ
ッグなどなど・・・

かなり高性能な武器を手にしていたんだが、俺にはそれを買える金
もない。

その時に教室の一つのほうきを使って戦つていたんだが、その武器
を手にした瞬間、

田頃運動音痴である俺がなぜかかなり俊敏になり、一番強くなつて
しまつっていたのだ。

「けつこう重いけど、なんとかなるよな」俺は一つの剣を腰に下げ、再びギルドへと戻つていった。

俺がギルドに戻ると、ハーブは駆け寄つてきた。

「おかえりー 養は作れそつ？」

「戻つてこいつほどのもんじやないけどな・・・じゃあ行くか」俺達はギルドをあとにした。

「ふうー 到着」俺達は森林へと辿つた。

早速イグリュスを探し始める。イグリュスは森林の方にいる、とペスカは言つていた。

「じゃあ奥へと入つていくか」俺はハーブと共に森林の奥へと進んでいった。

すると目の前にゴブリンが現れた。ニヤニヤしていく気持ち悪い。

「こは任せでー！」ハーブは背中にかけていた太刀を取り出していくつた。

しかし、その時には俺は動き出していた。

「ふうん！」俺は一瞬でゴブリンの懷へと接近し、腰にかけている剣を抜いて斬りつけた。

「ゴブーーー！」ゴブリンを一撃で倒すことができた。・・・腕は落ちてないようだな。

「え？ ヒロコキにも特技つてあるの？」

「失礼な！俺にだつてできることは何個かあるぞー。例えば、一いつの剣を使いこなすこととか・・・・・・あとは・・・・・「ゴメン、やつぱ無いわ」俺は少しでも自分を誇つたことが恥ずかしかつた。

「だよね。でもめちゃめちゃ強いじゃんー。もう雑魚魔術なんて使わなくていいんじゃない？」

「そうだな。今度からは剣士で・・・・・（フルルルルル）俺が職業を変えようとしたとき」、電話がかかってきた。

「魔術師からの転職は絶対許しませんよ。もしやつたらあなたの身分を奴隸に変えてしまいますね」

それは、あのクソ魔術師からの脅迫であつた。

「わかつたよー。魔術師（たまに剣士）でもつてこくよー」

「それもダメです。」

「いいじゃん！ EXILEでもボーカル兼パフォーマーの人いるじやん！」

パフォーマーはダンスする人のことです。

「む・・・・・しようがないですね。許しましょう」

「そりやどうも。じゃ」俺は電話をきつた。

・ それにしても魔術師さん・・・ビームから俺を見ているんですかね・・

第10話 討伐クエスト『炎翼龍の飛翔』～その1～（後書き）

残念ながらまだ戦いはしないのです・・・
広幸にも特技があったとは・・・作者もビックリ！

第11話 討伐クエスト『炎翼龍の飛翔』～その2～（前書き）

イグリュス討伐の続きです。

眠くて集中力が切れできました。

第11話 討伐クエスト『炎翼龍の飛翔』～その2～

目線・広幸

俺は魔術師ロウとの電話を終え、イグリュスの搜索を再開した。先程から太陽の陽射しが強く、かなり暑くて汗が滝のように流れる。しかも周りは樹木に覆われていて熱が逃げづらく、めちゃめちゃむし暑い。

「ねービーにいるんだらう?」ハーブはビーツやら飽きてきたようだ。

「うーん・・・きつとビー」か日陰で休んでいると思つよ。」

「なんで?」ハーブは俺に聞いてきた。

「だつて今日は炎天下だぞ。もし日向にいるとしたら太陽の熱でいいつの翼に引火したら大変だろ。しかも食事以外で無駄な体力を使うなんて思えないからな。」

「あ～なるほどね。じゃあ奇襲をかければいいね!」

「そうだな。でも見つけない限りには・・・」

俺が言葉を言い終わる前に、イグリュスを見つけてしまつた。

大きな木の下の日陰で寝ているイグリュスは森の王者とは思えなかつた。そつ、なにが一番残念だったかと言つと、寝顔だ。

いつもは王者の風格あるつりしい顔だったが、寝顔はどこかの中年

のおっさんのようにだつた。

いびきはひるさく、顔は「マジかよ?」つてぐらい滑稽で、笑いを
こらえるのが精一杯だった。

（ねえねえ、あれって本当にイグリュスなの?）

（うーん、ブサイクだけどそうだよな。とりあえず奇襲だ。ハーブ、
あいつの首を斬つて来てくれないか?）

わかった。やつてみる) そうハーブは言つて、ひつそりとイグリュ
スの首元へと近づいていった。

ハーブは首の前に立つと、背中にかけていた太刀と鞘を腰へと移動
させた。

そう、今からハーブは居合い斬りをやるのだ。
居合い斬りは呼吸を整え集中力を高めて一撃に全力を注ぎ込む構え
である。

もちろん、より強烈な一撃を繰り出すためにはかなりの集中力を必
要とする。

更に相手に大ダメージを与えるなら、より高度な太刀をばさきも必要
となるであろう。

「よく考えたら、初めてハーブの戦闘姿を見るかもしれないな」

そしてハーブは目を閉じながら、呼吸を整え始めた。だんだん息の
音が聞こえなくなつてくる。

スペツ・・・

俺が気付いたときにはハーブはもう刀を抜いており、イグリュスの

首を斬っていた。

ハーブの一太刀はイグリュスの首をかなり深く斬つており、血が大量に吹き出している。

「グゲエエエエー！」イグリュスは痛みに絶叫しながらも立ち上がった。

さっきまでの滑稽な顔が嘘のように思えるほど、勇ましく威厳のある顔立ちへと変わった。

そしてイグリュスは自分の羽を首にくつつけた。・・・かなり器用なんだな。

さらに高速回転をし始める。すると、首についている羽が燃え始めた。

一見自殺行為をしているように見える。しかしこれは賢明な判断だ、と俺は思った。

（豆知識）

出血している時の応急処置として、傷口を火で焼くと出血が止まるのだ。

皆さんは聞いたことは無いだろ？　鼻血がよく出る人がたまに言うことがある。

「鼻を焼けば鼻血がでなくなるんだよ」と。

これは、鼻血をでなくさせるために鼻の中を火で焼くといつ処置らしい。

そんな俺の解説はさて置き、ひとつやらイグリュスの処置が終わったようだ。

イグリュスは空へと舞い上がり翼を大きく広げた。

「グヒヒヒヒヒ！」イグリュスは羽を俺の方へ飛ばしてきた。

「ぐつ……」俺は避けきれなかつた炎をまとつた羽が俺の体へと突き刺さる。

「ヒロユキ！」ハーブは走ってきた。

「……こいつは強敵だな……」俺は体に刺さつてゐる燃えている羽を抜きながら言った。

羽を抜くたびに激痛が走り、そこから血が流れ出す。とてつもなく痛い。

「なら手つ取り早く罠を仕掛け始めるしかなさそうだな……」俺は瞬間接着剤と を取り出した。

それをハーブに持たせて作戦を説明をする。

「よし、ハーブ！どこか木に隠れるんだ！」

「分かつた！」俺はハーブが木に隠れたのを見計らい、イグリュスを挑発した。

「おい！お前の寝顔ブサイクなんだよ！みてて吐き気がしてくる

どうやら俺の挑発に気付いたらしく、かなりご立腹な様子。

「キヒヒヒエ！！」空中で高速回転を始めたと思うと、翼が燃え始めた。

そしてそのまま俺の方へと突っ込んできた。

「よし！」俺はイグリュスをひきつけたまま、ハーブの隠れた木のほうへと走つていった。

「準備できたよー！」ハーブは木の陰から顔をだして言った。

「いける！今ならいける！よし！ハーブ、移動しとけ！」俺はハーブの隠れていた木の目の前まできた。

「キエエエエー！」イグリュスは猛スピードで追いかけてきていた。

俺はイグリュスに直撃するギリギリで横へと回避した。

イグリュスが木に直撃する。すると同時にイグリュスはきにへばりついて動けなくなつた。

そう、イグリュスが激突した木には、大量の瞬間接着剤が塗られていたのだ。

ぶつかつた瞬間に瞬間接着剤にイグリュスがくつついて、動けなくなるというわけだ。

そしてここで今回の秘密兵器を投入しますか・・・

ハーブは手にしていた をイグリュスめがけてぶっかけた。

その瞬間、ものすごい大爆発が起こつた。

ハーブがぶっかけたものとはそう、ガソリンだつたのだ。

奴の体からでている炎で引火し、大爆発が起きたというわけさ！

A H A H A H A H A !

・・・すまない、あまりにも爆発が大きかつたんで興奮してしまつた。

爆発で巻き上がつた煙が消える頃には、先程までいたはずのイグリュスが消えていた。

「え？まさか爆発で木つ端微塵になっちゃった？」

「違う！上！」ハーブが指を差した方には今までとは比べ物にならない程の炎を吹き出しているイグリュスがいた。

炎は今まで以上に澄んだ赤色をしており、全身を炎でまとった奴はこちらを睨みつけている。

「クエニーニーニーニー！」

その叫び声と共に、俺達と炎翼龍の最期の死闘が始まった。

第11話 討伐クエスト『炎翼龍の飛翔』～その2～（後書き）

まだひとつあります。

次でこのクエストは終了になりますので宜しくお願いします！

第1-2話 討伐クエスト『炎翼龍の飛翔』～その3～（前書き）

戦いは「これで終了」です。

しかし、まだやることが残っているのでその4を作りたいと思います。

第1-2話 討伐クエスト『炎翼龍の飛翔』～その3～

俺達はイグリュスの動きを封じ、ガソリンという強力なアイテムを使って確実に奴の息の根を止めたと思っていた。

しかし、そんなものは幻想にすぎなかつた。

奴は爆発で舞い上がつた煙の中から再び颯爽さつそうと現れた。

奴の全身は煌びやかな炎がまとつており、顔立ちは先程の寝顔を忘れさせるような、怒りに満ち溢れた顔になつていた。果たして、戦いはどうなるのか！？・・・・次話につづく

「まだ終わらねえよ！てか始まつて200文字くらいしかたつてないだろ！」

おい作者！適当に話数を増やそうとしても許さないからな！」

俺は天から聞こえるナレーション的なものにツッコミを入れた。

「さてと、もつ銀は使つちやつたからな。じつやら剣で戦うしかなさそうだ」

俺は腰にかけている二つの剣を抜きだし、空にいるイグリュスのほうに構えた。

「ハーブ！一気にしかけるぞ！」俺が言つと同時に、ハーブ太刀を構えた。

「うおおおおおおー！」俺はイグリュスのほうへとジャンプする。
・・・肝心な事を忘れていた。

あくまで俺は剣の扱いが上手いだけであつて、身体能力はダメなんだつた。

当然、ジャンプはイグリュスに届くはずも無い。30cmくらいしか飛べなかつた。

「うわー。ヒロユキかつこ悪いー」ハーブの冷ややかな視線が痛い。

「ぐつ！今のは見なかつたことにしてくれ！」

俺がハーブにお願いしていると、イグリュスは空からダイブしてきました。

「グエニエー！」大きく広げた翼に俺は直撃した。

「痛ッ！熱ッ！」俺は一瞬で地面に叩きつけられてしまった。
・・・アクションが薄いことにはかまわないでください。

「ヒロユキ！・・・よくも！」ハーブは怒りで顔を歪め、イグリュスの左翼を斬りつけた。

「グエニエー！」イグリュスは翼を斬られたことに激怒し、ハーブを吹つ飛ばした。

「ハーブ！」俺はなんとか立ち上がり、吹き飛ばされたハーブの方へと走つていく。

ハーブはどうやら氣絶しているようだ。これでは戦えるのは俺だけであらう。

「やはり、俺のよつなダメ人間では無理なのか……」「俺はクエストを諦めようと考えた。

しかし、俺はハーブに言われた言葉を思い出した。

（ヒロユキは確かにブサイクだし、バカだし、鈍感だし、運動音痴だし、恋愛に対してかなりのチキンだし……でも……すつごくやさしい人だと思う！）

「やさしい人……か」俺は腕につけているブレスレットを見てつぶやいた。

そして俺は決意した。

「おい、寝顔ブサイク！ 今俺はハーブにプレゼントを無理矢理買わされて金欠なんだよ！

お前をぶつ潰して金を荒稼ぎしてやる！」俺は再び剣を構え、奴の懷へと潜り込む。

「グエニニニ！」奴は燃えさかる翼で俺に攻撃してきた。

「ふつ。双剣を手にした俺はダメ人間じやないんだよおおおおおおおおお！」

俺は翼を華麗に交わし、奴の腹に剣を振りかざした。

「グワアアアアアアア！」イグリュスの腹から血が飛び散り、それをこらえながらも奴は空へと舞い上がった。

「……そついえばあと一つだけいい作戦があるかも知れないな」俺はあることを思い出し、ある場所へと走り出した。

そう、今俺が向かっている場所は、この前俺がゴブリンの討伐クエ

ストを受けたときに罠を仕掛けた場所だ。

もし運がよければ、ピアノ線が残っているかもしれない。

俺はイグリュスの空から羽を飛ばしてくる攻撃を避けながら罠のあつた場所へと走つていった。

「あつた！」俺はピアノ線を見つけることができた。
それを急いで掴み、剣の持ち手に結びつける。

二つの剣はピアノ線によつて繋がつた。これでさすがに武器の完成だ。

「グエエエエー！」イグリュスは空中にいる。これはいいチャンスだ。

「喰らえええええ！」俺は片方の剣をイグリュスへと投げつける。

イグリュスは軽く剣を避けた。そして馬鹿にしているような顔でこつちを見てきた。

「お前の方がバカだよ！」俺は手元にある剣を大きく振つた。
すると、先程イグリュスが避けた剣の軌道がずれ、剣についているピアノ線が奴の体に巻きついた。

「グエ？」奴はまだ事態を理解していないようだ。

「うおおおおおお！」俺は渾身の力で手元にある剣を引っ張る。
すると、イグリュスが徐々に地面へと近づいてきた。まさに縄引き状態だ。

「グエエエエエー！」「イグリュスも必死に抵抗する。もちろん、俺の筋力ではイグリュスを引き上げることは不可能だつた。

しかし、俺は違うことを狙つていた。

イグリュスが抵抗してくれたおかげで、ピアノ線が奴の体を切り刻む。

イグリュスはうめき声を上げている。だいぶ弱つてきているようだ。

「氷の精靈よ、我の体にその力を示せ！－アイススピア！」

俺は右手に氷の棘を作り出す。今までにはつらら程度の雑魚魔法だつた。

しかし、魔法石を装備し、魔物を倒してきた俺の魔力は以前よりもはるかに上がつていた。

形成されたのはつらら程度のサイズだった。

しかし、それが10本くらい形成された。これも魔力が上がつたからであろう。

「死ねえええ！」俺はイグリュスめがけて投げつけた。

6本くらいは奴の炎で解けてしまった。しかし、残りの4本がハーブが斬りつけた傷口へと突き刺さる。

今までではスライムにも突き刺すことができなかつたが、今回はイグリュスに刺さつた。

「グギヤアアアー！」つららが奴の傷口をえぐり、とうとう奴は力尽きた。

ドサツ、と地面にイグリュスが落ちる。そう、俺達は森の王者に勝利したのだ！

「やった！・・・（ドサッ）」

しかし、俺にも起きているほど の体力も無く、そのまま気絶してしまった。

目線：魔術師ロウ

「おお、どうやら炎翼龍に勝利したようですね。」

やはり彼は凄い実力を持つているようだ。
あれだけの貧弱魔法と劣化した武器で倒すとは・・・彼の実力も計り知れませんね。

「さてと、あのまま倒れたままは可哀想ですし・・・ちょっと転移魔法を使ってあげましょ うか。」

私は指を噛み切り、地面に巨大な魔方陣を書き始めた。

「これでよしつと」私が魔方陣を書き終えると同時に魔方陣は光を放つ。

そして、その魔方陣の中に広幸君と彼の彼女さん？と討伐したイグリュスが現れた。

「田を覚ましたらきっと驚きますね～楽しみです。」

彼達が田を覚ますまで、魔物討伐でもしてきましょ うか。

第12話 討伐クエスト『炎翼龍の飛翔』～その3～（後書き）

主人公の魔力をもう少し上げたほうがいいのかな・・・
感想・指摘お待ちしています！

第13話 討伐クエスト『炎翼龍の飛翔』～その4～（前書き）

今回は広幸の気持ちを伝える話です。

第13話 討伐クエスト『炎翼龍の飛翔』～その4～

目線：広幸

俺は田を覚ました。すると、周りの景色が違うことに気付いた。

「あら、気付きましたか？」そこに立っていたのは魔術師であった。魔術師の横には顔が2つあり、犬のような顔立ちで、大きな翼を持ち、藍色の毛で体を覆っている赤い眼の獣が倒れていた。

「あのー、それ何？」

「ああ、これですか。これは『オルトロス』ですよ。」

（図鑑データ）

オルトロス 別名：式顔獣 產物：式顔獣のアギト

ギリシャ神話で語られている一つの顔を持つ犬です。ギリシャ神話では落ち着きの無い性格として語られているが、こちらの世界のオルトロスは理性を持つている。しかし、かなり凶暴な魔物。

「まあギルドレベルが4くらい無いと戦うことは無いでしょう。しかしその分だけあって報酬はかなり高額ですよ。広幸君、あなたも受けてみてはどうですか？」

「絶対嫌だよ！死んじゃつもん！」「俺は断固拒否した。

「まあ抱むのは無理もないでしょう。それより体の傷は治りましたか？」

「ん？ 傷が治ってる・・・俺はからだを見たが傷は無く、痛こというも無かった。」

「ふふふ、ひょっと回復魔法を使いましたからね。」

「ありがとうございますーてかその魔法教えてください～～～」

俺はハーブから醫師した上目遣いを使ってみた。

「なんですか気持ち悪い。」

効果のだった。なんかすごい恥ずかしいんだけど。

「まあ教えてあげてもいいでしょう。あなたはひょっと弱すぎますもんね。ある程度の魔力はつけてあげようと思っています。チートまでは行きませんけど」

「本当ですかー？」

「しかしあなたが修行について来れたらですけどね」

「なんでもやりますからー」俺にも唯一の希望が見えてきた。

「じゃあしじばりへの間はいつまでもりこます。」

今からあなたとイグリコスとそこで倒れているあなたの彼女さんを一度、ギルドに転送させますから。

ハーブをとも一皿お別れを告げて置いてください。」「

「……わかりました」ハーブと一緒に離れなくてはいけないのか。俺はそう考えると切なくなってきた。あいつも嫌だつて言つかもしれないな……

「じゃあ行きますよー」魔術師は指を噛み切り、自分の血で床に魔方陣を書き始める。

「早く入ってください」そう言われたので、俺はハーブを担いで魔方陣の中に入った。

その後に魔術師ロウはイグリュスの周りにも魔方陣を書き始めた。

「それでは」魔術師が指をパチンと鳴らすと同時に、魔方陣が光りだす。

俺達は光の中に吸い込まれていった。

「やつと田を覚ましたか」

俺が目を覚ますと、ギルドマスターのフレアがいた。

「いきなりイグリュスとハーブと共に、ギルドの玄関に現れてびびつたぞ。」

「ああ、魔術師ロウさんに転送してもらつたんですよ。」

「なるほどな。確かにあの上級転送魔法が使えるのはロウくらいだろうしな」

(そんなにあの魔術師は強かつたのか……)

「それよりこれが今回の報酬だ。」俺はフレアから茶封筒を渡された。

基本報酬：3万メイル

産物報酬：炎翼龍の魔法石×2（4万メイル）

物品報酬：炎翼龍チケット×4

「すいません、この炎翼龍チケットってなんですか？」

「ああ、魔物を倒したときにもらえるチケットだ。

素材を渡すのは面倒なんでな。そのチケットを何枚か集めて鍛冶屋とかに行くと

武器を強化してもらえたり、金に換金してもらえたりするんだ。」

「なるほど、ありがとうございます。では「俺はギルドを後にしようとしました。

「あー。ハーブがお前のことを外で待っていたぞ！」

「わかりました。行つてみます。」

そういうえばまだ俺の気持ちを伝えて無かつたよな。

俺は外に出た。そこにはハーブが待っていた。

「ヒロユキ！もう大丈夫なの？」

「ああ、傷はなんともないよ。ハーブは大丈夫？」

「うん！目が覚めたら治つてた！」

そつか。ハーブは魔術師のことを知らないもんな。

「そうだ。はい、これ報酬」「俺は報酬の半分である3万5000メイルを渡した。

「こんなものよりもっと欲しいものがあるんだけど・・・」
ハーブは報酬を受けとりながらもモジモジしながら言った。

「ああ、そりだつたな。俺の気持ちを言わないと・・・」

「どう?」ハーブは目をそらしながら言った。

「・・・」「めん。やっぱ俺にはハーブを幸せにすることは無理だよ。
気持ちは凄く嬉しかったけどハーブには俺なんかよりもっととい
人がいると思う。
もしも俺がもつと強くていい人間になれた時には俺から告白するか
ら・・・」

「・・・わかった。じゃあね！」

ハーブは俺に一度も目を合わせることが無く走つて帰つてしまつた。
なぜだらうか、ハーブの声は震えていた。

やつぱり俺みたいな男が「付き合つて」なんて言えない・・・
もし付き合つたとしても明日からはこの街から離れるなんてもつと
言えない・・・

「いひそりいなくなるのも悪いけど、しょうがないよな・・・」

俺が出した結論に後悔はない。

でもなぜだらう、さつきから涙が止まらないや・・・

目線：ハーブ

大好きな人に振られてしまった。

でもヒロユキがこれでいいならいいんだよね・・・

私もちゃんとヒロユキのこと諦めなきゃ。

でも、ヒロユキは嘘をついていた。

「明日からは普通に接していくかな・・・
やつぱり私は諦めない。何度も、しつこくたつて諦めないんだ
から！」

第一章「ダメ人間の異世界転生」 完

残高：	40000メイル
収入：	3万5000メイル
支出：	3000メイル
合計：	3万6000メイル

第1-3話 討伐クエスト『炎翼龍の飛翔』～その4～（後書き）

これで第一章が終わります。
ちょっと短かつたと思いますが
第一章が始まる予定です。
内容は、広幸が若干チート化するまでのお話です。

第14話 「俺、未開の地へ行く」（前書き）

第二章「ダメ人間チート化！？」の始まりです。
果たして広幸はチート化することができるのでしょうか？

第14話 「俺、未開の地へ行く」

目線・広幸

朝だ。俺は今日からの街を離れなくてはならない。ハーブにはちゃんと俺の気持ちを伝えたし、もつとも悔いは残っていない。

「さてと、長い修行になりそうだ。ちょっと準備をしていくか」俺は鍛冶屋へと向かった。

「あいよーこりがっしゃいー」

「あのー。ここの鍛びた鉄剣を強化したいんだけど」

「あいよー。じゃあチケットを渡してくれないかい！」

「はい。」俺は炎翼龍のチケットを2枚差し出した。

「なるほど・・・これなら『フレイムツインソード』くらいが作れるぞー！」

「ああ、任せた。・・・剣なんてわかんねーよ。なんでもいいから早く作ってくれ！」

「じゃあちよつと待つとけよなー」そう言つて鍛冶屋のおじさんは奥の工房へ入つていった。

（2時間後）

「はいよー完成だ！」おじさんはドヤ顔をしながら現れた。
おじさんが手にしていたのは、先程までの鋸びついた剣とは思えない美しい剣であった。

剣は薄い赤色をしており、金属特有の光沢を放つていて、炎翼龍の名にふさわしかつた。

「おお、これは随分と美しい剣になつたな！」

「こやこや、あんちゃん！」の剣を振つてみると凄さがもつとわかるよー！」

俺はおじさんに剣を渡された。ちよつと振つてみると、

かなり軽量化されたようだ。これなら筋肉痛にもならずに済みそうだ。
しかし、それ以上に素晴らしいのは剣の能力である。

振つたら剣の刃が炎をまとつ。これも炎翼龍の素材を使つたからなのであらう。

「どうだい？かなりいい武器だらう？」「おじさんはまだドヤ顔をしている。

なんだか凄く腹が立つが、本当に素晴らしい武器なので許しておこう。

「ああ、ありがとう。じゃ、俺は店を後にしておこうとした。

「ちょいちょいちょいちょい！あんちゃん、金払つてないよー」「おじさんが止める。

「え？ チケットだけじゃダメなの？」

「そ、うだよ！ はい、じゃあ2万メイル拵つてね！」

ぐ・・・最悪だ。結構な高額じゃないかああああああああああああああ

「……後払いでも俺は猛ダッシュで店から逃走した。

卷之三

おじさんは前に突出した大きな腹をゆるゆると揺らしながら俺を追いかけてくる。

俺は忘れていた。
自分がボッチャヤリ系の中1と足の速さが変わらないことを・・・

「うぎやああああああああああああああ！」俺は捕まつてしまつた。

「あんちゃん、なんで逃げたんだ？」
俺は拷問されていた。

「いや、ちょっと金を払いたくなかつたもので・・・」みんなで

い！」俺は土下座した。

「ふざけんな！ そんなんで許してもいいだろと思つたか？」

「ちやんとお金は払ってますから・・・」「俺はお金を取り出した。

「今日は3万メイルで許してやるからなー。ありがたく思えー。」

「・・・あの、お金1・5倍に増えてません?」

「うべうべうなー。いいから払え!」

「ひいひいひー! 僕はおじさんのお脅迫に心が折れ、3万メイルを支払った。

「よしー! ジャあもう帰つていいぞ。僕は今から余計に貰つた1万メイルでパチン! をしてくる!」

~心の声~

ふざけやがつて! 僕の貴重な1万メイルをなんだと思つてやがる!
中年太りの分際で! 潰す! 潰す! T U B U S U ! H A H A H
A H H A ! !

しかし、ひとなことが言えるわけも無く、僕は渋々鍛冶屋を後にしてた。

「さてと、武器も置つたわけだし・・・魔術師のところに行くが折れは魔術師に電話した。

「もしもしー。うち魔術師ロウのハンバーガーショップ本店です。

」

「なんでだよ! どんな副業してんだよー! 僕はいきなりの出来事に驚きながらも正確にツツコんだ。

「ああ、これはちょっと趣味でやつてるだけですよ。」

「どんな趣味してんだよー。」

「それよつ、ちゃんとイメージキャラクターもあるんですよ。名前はロウネル・サンダース君って言つんですよ。」

「おーーーそれカーラおじさんのがパクリじゃねーか！しかもケンシキーだから！ハンバーガーじゃないからーせめてドナードーナツかよー。」

「なかなかツシミが上手ですね。魔術師じゃ無くてツシミが上手に職業変更したうぢうですか？」

「どんな職業だよー戦えねえよー。」

「それよつ、もうコチラへ来る準備は整いましたか？」

「ああ、だから電話したんだ」

「じゃあ今から転送しますね。行きますよー。」

魔術師がそう言つと、俺の足元に魔方陣が出来上がり、光を放つ。そして俺は光の中へと吸い込まれた。

「早く起きてくれださーーー」俺が目を覚ますとそこには魔術師がいた。

「さてと。じゃあ急なんですが、あなたを未開の地へと転送しますね。」

「未開の地？」

「そうです。この世界ではまだ私達のような人族の住んでいないような場所があります。

そこにはブルースライムのような低級魔物からオルトロスのような上級魔物まで、

たくさんの種類の魔物がつよいります。そこで魔物を倒してきてください。

全部で3つの場所にわかっているのですが、場所によつて魔物の強さが変わります。

最初は推奨ギルドレベル1～2で、次は3～4、最後の場所は5です。

魔力は魔物を倒してあげるのが手つ取り早いので効率よく上がりますよ。

あ、死んじやつたらそれでおしまいですけどね。」

「なんですか？師匠の回復魔術で治せるんじや・・・」

「古くから、死者を生き返らせる『黒魔術』の記載された魔術書は封印されました。

だから私にも死者を復活させることはできないのです。

まあ、瀕死状態の時なら転生くらいはできますけどね。では話を続けます。

せっかく魔物を倒したとしても、報酬金が貰えないなら嬉しくないですよね？」

「もちろんですよー。俺は金稼ぎ以外には目的なんて無いんですから！」

「そ・こ・で！あなたの倒した魔物は私がギルドに転送します。

そして手に入つた報酬をあなたに渡そうと思います。これで文句な

いですね? 「

「あつがとうござります……あ、でもお願ひがあるんですけど」

「何ですか? まさかロウネル・サンダース君人形をくださいとか?」「ちづりよ……できれば俺が修行していることは誰にも言わないでくれませんか?」

「なぜですか?」

「実はハーブに街を離れることを言わずにきたんです。きっと俺がどこか遠くで魔物と戦つてゐるなんていつたら一緒に来るつて言つうと思います。」

あと、心配はかけたくないんですね。だから、誰にも言わないでください!」

「……わかりました。かわいい教え子の頼みですもんね。なんとかしましょ。なら彼女さんのためにも早く修行を終わらせないといけませんね」

「まだ付き合つてしませんよ……でも修行が終わつて街に戻つたら告白しようと思ひます。」

「フフフ、それは楽しみですね。じゃあ早く転送しちゃいましょうか。」

魔術師は魔方陣を書き始めた。今回は今まで以上に複雑な形の魔方陣だ。

俺は魔方陣の中へと入った。

「それでは、頑張ってください～」

魔方陣が光を放ち、俺は光の中へと消えていった。

・・・これから俺の修行が始まるのだ

目線：魔術師ロウ

彼には心底驚かされましたよ。まさか、ハーブさんに内緒で来ると
は思いませんでした。

しかし、彼の覚悟はよく伝わりました。

転生前から随分と変わりましたね。もう彼はダメ人間なんかじゃな
い。

彼は金稼ぎのためだけにこの修行を受けたのではないのでは
きっとハーブさんを守るために力が欲しかったのですね。

まあ、愛の力はどこまで通用するのでしょうか楽しみですね。
私の予想では、修行を終えるまで10年はかかると思います。

・・・私ですら20年かかったのですからね。

残高：	3万6000	メイル
収入：	0	メイル
支出：	3万	メイル

合計：
6000マイル

第14話 「俺、未開の地へ行く」（後書き）

あの魔術師でさえ20年かかったから
ダメ人間はかなりの時間がかかることでしょう。
まあのんびりと書いていくので宜しくお願いします。w

第15話 討伐クエスト 『牙狼獣討伐』（前書き）

今回は新しい魔物を登場させました。

第15話 討伐クエスト 『牙狼獣討伐』

目線・広幸

「……」が、未開の地か？」

俺が目を覚ましたところは大きな草原であった。かなり見晴らしがよく、魔物に見つかったら逃げるのは困難であろう。

その時、電話が鳴った。

「もしもしー。つきましたか？」

「はい、かなり見晴らしのいい草原につきましたよ。」

「や」は、未開の地の一つである『グラル草原』ですよ。あ、言い忘れていましたけど、フレアさんにはあなたが修行中のことを言つちやいました！」

「なんですか！？」

「フレアさんから、クエストをだしてもらえたようにするためです。これであなたが未開の地の魔物を討伐すると、ギルドレベルも上がるというわけですよ。」

「なるほど。まあ嬉しいですけど……」

「大丈夫です。フレアさんには口止めしききましたから。もし言つたら、あの人の脳みそを破壊する魔法でも使つちやいますんで」

「そこまではなくていいです！！」

あの魔術師はそんな極悪魔法まで使えるのか・・・

「じゃあ早速ですが、クエストがでていますよ。
今回討伐してもらいたいのは『牙狼獸』です。」

「図鑑データ」

牙狼獸 別名：ガルロス 産物：瑠璃色の牙

ガルロスは瑠璃色の鋭利な牙を持つ狼の魔物。
スピードはそれなりに速く、獲物を仕留めるために発達した牙で攻
撃してくる。

「ガルロスはイグリュスよりも弱いですから、あなたなら倒せるで
しょう。」

今回の報酬は、

基本報酬：80000メイル

産物報酬：1個×40000メイル

物品報酬：牙狼獸チケット×3

ですよ。」

「まあとつととそのガルロスを討伐すればいいんだろう？いつてくる
よ」

「頑張つてくださいね」

俺は電話をきつた後、ガルロス搜索を始めた。

「でも一体どこにいるんだよ・・・」

周りを見てもブルースライムやゴブリンくらいしかいない。

「とりあえずこいつらでも討伐しておくか」

俺は腰にかけている剣を構えた。そして、目の前にいたスライムを斬る。

「グギギ！・・・」どうやら一撃で倒せたようだ。

やっぱり俺には剣士のほうが向いているような気がする。

そう思いながら俺は剣を腰にかけた。

「次は魔術でも使ってみるか。

炎の精霊よ、我的体にその力を示せ！イナズマアロー！」

右手に雷の矢が形成された。俺は矢をブルースライムめがけて投げる。

矢はスライムに当たると同時に放電した。

「ギルギガ！！」

一撃で倒せはしなかつたが、かなりのダメージを「える」ことができた。

これも、この前のイグリュスの戦闘で魔力が上がったからだろう。

「よし、炎の精霊よ、我的体にその力を示せ！ファイアボール！」

俺の右腕に炎の球が出来上がる。

その球を瀕死のブルースライムに投げつける。

「グギギ！・・・」炎はスライムの体を焼き滅ぼした。

もう俺の炎はチャーハンを炊けるくらいまでに成長しており、スライムはプルプルした灰になった。・・・気持ち悪い。

「まあこんなところだよな。じゃあガルロスを探すか。」

俺は周りの搜索を続ける。すると俺の足元の地面が盛り上がった。

「何だ！？」俺が気付いたときには遅かった。

そう、ガルロスが地面に潜んでいて、地面から牙攻撃を仕掛けてきたのだ。

「ぐはああ！！」俺は地面からでてきた鋭利な牙に足をやられた。しかし、俺は素早く腰の剣を抜いて、牙の出てきた地面に突き刺した。

「ガルウウウア！！」地面から悲鳴が聞こえた。

そして、地面から大きく腰の剣を抜いて、牙の出てきた地面に突き刺した。

「ガルル！」奴は俺に突進してきた。今までの魔物よりも速い。俺の目の前で、ガルロスは一瞬沈み込み、牙をアップバーするように突き上げてきた。

「うおつと！」

俺はギリギリで突きあがってきた牙を避けた。そのまま剣で奴を斬る。

しかし奴も俺の振りかざした剣が当たる前にバックステップして避けた。

「こいつは中々手強そうだ・・・」しかし、俺には先程思いついた新しい作戦があつた。

「炎の精霊よ、我的剣にその身を宿せ！フレイムソード！」

俺の手からでてきた炎は、剣の周りを覆つた。

そう、魔法を武器に使つたのだ。

元々が炎属性の俺の剣に更に炎を追加することにより、強力な武器に変わつた。

「ガルル・・・」ガルロスは2本の牙をこちらに向けて威嚇している。

「うおおおおお！」俺は剣を大きく振つた。

もちろん、この剣のリー・チでは届くはずも無い。

しかし、俺が狙つていたのは剣で奴を斬ることではなかつた。

振ると同時に、剣から炎の球がガルロスの方へと放たれた。この剣を覆つてている炎と、この剣から出る炎が飛び出したのだ。

「ガルル！」不意をつかれたガルロスは避けることもできず、炎の球に直撃した。

そして、ガルロスは吹き飛んだ。しかし、俺は追い討ちをかける。

「もう一発！」俺はもう片方の剣を振つた。

剣から炎の球が放たれ、吹き飛ばされたガルロスに直撃した。

「キヤン！」犬のような悲鳴を上げて、ガルロスは地面に倒れた。

「やつたのか？・・・」俺は産物を回収するために近づいた。

「ガルルガ！」するといきなりガルロスが立ち上がり、俺に牙を刺してきた。

「あがあ！！」俺の腹に牙が刺さる。傷口から血が飛び散る。でもここで負けるわけにはいかない。

俺は最後の力を振り絞り、奴の首元に剣を突き刺した。

「ガ・ル・・・」首から大量の血が飛び散り、ガルロスは倒れた。

「終わった・・・」俺はそつと突き刺さった牙を抜いて、魔術師に電話した。

「・・・もしもし、倒し終わりましたよ・・・」

「あーお疲れ様です。じゃあ魔物はフレアに渡しておきますね。」

「はい・・・お願いします・・・」

それと同時に、俺の横に倒れていたガルロスが魔方陣に吸い込まれ、消えていった。

「今回の報酬の、

基本報酬：80000メイル

産物報酬：瑠璃色の牙×2 80000メイル

物品報酬：牙狼獣チケット×3

はあなたの家のポストに送つておきますね。

あ、あとかなり傷ついてるっぽいですね。じゃあせっかくですし回復魔法を教えましょうか

「本当ですか！？」

残高 :	6 0 0 0 メイル
収入 :	1 万 6 0 0 0 メイル
支出 :	0 メイル

合計 : 2 万 2 0 0 0 メイル

第15話 討伐クエスト 『牙狼獣討伐』（後書き）

だんだん書いてるうちにチート化してきたし・・・w
ちょっと抑え目でいきましょうかねw

第16話 「俺、回復魔法を覚える話」（前書き）

今回は新しい魔術を覚える話です。

第16話 「俺、回復魔法を習得する」

目線・広幸

「本当に回復魔法をおしえてくれるんですかー?」

「ええ、この先必要不可欠でしょう。では、そちらに魔術書を送るのでそれを見て習得してください。」

電話がきれると同時に、魔方陣が現れ、そこから一冊の魔術書が現れた。

「これは・・・『ヒールリング』?」

魔術書には、『ヒールリング』と書かれている。

俺は魔術書を読み始めた。たくさんの文章が書かれている。

1・ヒールリングの効果

魔力をあまり必要としない初級回復魔術。

回復量は他の魔法に比べて少ないが、ある程度の傷は治すことができる。

傷口を塞いだり、体の疲労の軽減させるなどの応急処置に使われやすい。

2・ヒールリングの発動方法

習得には標準の魔術者でも3日はかかる。

まずははじめに、魔力が血液中を流れていることを想像する。こつすることで、実際に魔力が血液中を回りはじめる。

次に、その魔力が手に溜まつていいくことを想像する。

「つする」とで血液が流れながら、手に集まつていいく。

最後に、傷口に魔力を溜めた手をかざす。

すると、手から魔力によつて形成された輪が出来上がる。その輪が傷口の周りに近づくと、自然治癒能力が高まつて回復し始めるのだ。

「なるほど……」うか？」俺は血液中に魔力が流れることを想像し始めた。

心臓から魔力が血液と共に流れしていくを感じる。

だんだん体が熱くなつていいく。それと同時に傷口の痛みが多少だが和らいだ気がした。

そのまま俺はその魔力が右手に溜まつていくことを想像する。ドクドク、という血液が流れる感覚を感覚を感じながら、右手へと意識を高めた。

だんだんと体の熱さが無くなつてきた。

その代わりに右手がどんどん熱くなつていいくを感じた。

しかし、それと同時に傷口の痛みを激しく感じた。

「ぐつ！」俺はあまりの痛みに耐え切れず、意識を傷口へと集中させてしまった。

その瞬間に手の熱くなる感覚は消えてしまった。

「魔術失敗か……」俺は本当にこんな集中力を使う魔術ができるのか、と思つてしまつた。

しかし、俺には集中力だけには自信がある。

「あんなブラック会社でさんざん重労働させられてきたんだ！」

「んくらいのあの極悪な仕事に比べたら簡単だ！」

『気を取り直して俺は『ヒールリング』の練習を始めた。』

「30分後」

「・・・・・だめだ・・・・・もう少しなの・・・・・」

俺はなんとか痛みをこらえて、右手に輪を布つ出すことはできた。しかし、その後に傷口に輪を近づけるとまた少しどのとおりで輪が壊れてしまうのだ。

「やつぱりにかが足りないのか・・・・・」

俺は再び魔術書を開いた。魔術書は300ページ近くも長々と文章が書いてある。

しかし、魔術の習得に関係なさそうなことが書いていたりするのだが、

俺は一度全ての文章を読み直していた。

すると、ある言葉に引っかかった。

『美しい女王の、緑の腕輪を創りして、その輪がざさん時、傷を癒さん。』

輪壊れし時、魔法石で輪を創らん。されば傷癒す輪できん。また魔術とは、月が創り、太陽が壊す。』

とりあえず、ヒールリングで輪を作ったら傷口にかざすと傷が治る。もし壊れたときは、魔法石で輪を作れば傷を癒すことができ、といつことはわかった。

しかし、魔法石に意識を高め、魔力を溜めよつとしているんだが、全く輪ができない。

更にわからないことは、『美しき女王』のことだ。
この魔術を創りだした人だとは思うのだが、それに関しての内容が
魔術書に書いていないのだ。

きっと最後の『月が創り、太陽が壊す』にも何か関係があるのであ
る。」

「でもおかしいな。魔術は太陽が出ていても使えるんだけど……」
俺は頭を悩ませていた。じうじうする間にも傷口の出血は止まらない。
い。

その時、もう一つの不可解な点に気が付いた。

そう、最後の1ページだけが真っ白なのだ。
ざっと目を通しただけでは気にならなかつたのだが、今見るとなん
だが不自然だ。

前のページの文章が途中で終わっているのだ。しかし、その続きは
書いていない。

その時、魔術師から電話があつた。

「どうですか？ 魔術は覚えられましたか？」

「いえ、いいところまでいくんですけど、輪が壊れちゃうんですよ。
・・・」

「やはり、そこで手間取っているところでしたか。」

「すいません、ちょっと質問があるんですけど・・・」

「なんですか？まさか、ロウネル・サンダ……」

「ちげーよー。どんだけ引きずつてんだよ……いや、ちよつとかしいんですよ」

「なにがですか？」

「ちよつと不自然なんですね。あの『魔術書』……」

「ほつ・・・ビージーですか？」

「最後のページだけ、何故か空白なんですよ。普通なら氣にならないんですけど・・・」

前の文章が途中で切れているんですね。そこで質問なんんですけど、何か条件を満たさないと封印が解けないよくなっている魔術とかつてありますかね？」

「ああ、古の封印魔術とやらを聞いたことがありますよ。昔はそうやって魔術の内容を守つてきました」

例えば、水をかけたら文章が浮かび上がるとか・・・でも、必ず魔術書にヒントが隠されているんですねー。まあ頑張つてください」

「わかりました。ありがとうございます」

俺は電話をきつた後、あの文章を思い出した。

『美しき女王の、緑の腕輪を創りして、その輪がざさん時、傷を癒さん。

輪壊れし時、魔法石で輪を創らん。されば傷癒す輪できん。

また魔術とは、月が創り、太陽が壊す。』

この文章にヒントが・・・ん？

「そうか！－この封印魔術を解く方法は、太陽に当てる」ことだ！－俺は気付いた。この封印魔術は太陽の光によつて解かれることを。

そして俺は真っ白な最後のページを開き、太陽の光を当てる。すると、だんだん文章が浮かび上がってきた。

そこに書かれていたのは、女王のことと、魔術の真理であった。

アリドネの女王。この魔術を創り出した人物。

彼女は世界初の回復魔術を創り出した。

この魔術は、簡単に輪をつくることはできない。

作り出すと必ず壊れてしまうのだ。しかし、肝心なのはこの後である。

その時に輪を創り出した手の人差し指で輪を描くのだ。

すると、再び輪が出来上がる。この輪こそが回復に使われるものである。

この魔術書を読んでいるなら、一度は見たはずだ。

『輪壊れし時、魔法石で輪を創らん。されば傷癒す輪できん。』

アリドネの女王は、魔力が非常に少なかつたと言われている。

しかし、強力な魔物を国中の者達総動員で倒させ、

その魔物の持つていた魔法石を装備したことにより、強力な魔力を手にしたのだ。

その魔法石は指輪になつており、人差し指につけていたらしい。

女王はもの凄くその指輪を気に入つていたので、自分の開発した魔術を発動する際に

人差し指を使わないとできないよつこしたのである。これが、『魔法石で輪を創らん。』の意味である。

「なるほど。ならこいつすれば・・・」

俺はもう一度右手に意識を集中させ、輪をつくつた。そして、それを傷口に近づけると壊れてしまった。

その時、右手の人差し指で輪を描いてみた。

すると、緑色の輪ができ始めた。それを傷口に当ててみると、だんだん傷口の痛みが無くなつていき、2分もすれば傷が完璧に治つた。

「よつしゃああああああああ！」

俺は新たに、『ヒールリング』を覚えたのだった。

目線：魔術師ロウ

やはり彼の頭の良さには驚かされますね。

あの謎めいた文章を解読するとは・・・正直驚きました。

「この先あの魔術は大変役に立ちますよ・・・広幸君」
だつて次の魔物はイグリュスよりも強いんですからね。

残高：	2万2000メイル
収入：	0メイル
支出：	0メイル

合計：2万2000メイル

第16話 「俺、回復魔法を賣る」（後編）

いや、なんか魔術書の暗号が気持ち悪いほど適当になつてあります。
た・・・
感想・評価・指摘お待ちしてます！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5527z/>

転生した異世界で金を荒稼ぎ

2011年12月31日19時21分発行